

# 時々の響き

塙町の文化財



塙町教育委員会





## 刊行のことば

埴町教育委員会 教育長 平野 久仁雄

埴町では、町民のみなさんの文化財に対する御理解と、その保護協力を願って、昭和五十三年一月に「埴町の文化財」(第一集)を刊行いたしました。また、埴町には町史編さんの中では他に比して誇り得る立派な「埴町史」全三巻(昭和五十四～六十年発刊)があります。

これらに記載されている文化財は、わたくしたちの埴町を築いてこられた遠い祖先の生活の足跡であり、貴重な遺産であります。わたくしたちは、それらに触れることにより、郷土の成り立ちを学び、郷土をより深く理解することができると思います。

当教育委員会は今回、これらの遺産に触れるための、読み易く親しみ易いものとしてこの小冊子を編さんいたしました。

町民のみなさんが少しでも祖先の生活に思いをさせ、心に潤いと豊かさを持つことができ、また、これからのふるさとづくり役に役立てることができれば望外の喜びであります。

最後になりましたが、この「時代の響き」の編さんにあたり、御多忙の中、心よく御執筆下さいました諸先生方、そして御協力を頂きました関係者の方々に、深く感謝を申し上げて刊行のことばといたします。

平成二年一月

# 目 次

教育長挨拶 .....	埴町教育長 平野 久仁雄	2
写真で見る埴町の自然文化 .....		4
埴町全図 .....		8
埴町の歴史<通史>——付・地区別文化財所在図—— .....		10
埴町の指定文化財 .....		18
<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">県指定天然記念物</span> 向ヶ岡公園のサクラ		
<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">町指定有形文化財</span> 古宿観音堂／常世観音堂／湯舟観音堂／薬王寺薬師堂 東浄寺薬師堂／木造十一面観音立像／銅造地藏尊半跏 像／木造如意輪観音菩薩坐像／木造聖観音菩薩坐像／ 木造地藏菩薩半跏像／板碑（延文五年銘）		
<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">町指定史跡</span> 陸奥代官埴陣屋跡／向ヶ岡公園		
仏 像 .....	若林 繁	33
[概論] 埴の仏像 .....		34
解 説 .....		38
建 造 物 .....	草野 和夫	53
解 説 .....		54
埋蔵文化財・石造物 .....		63
埴町の遺跡・古墳 .....	田中 正能	64
町内の遺跡から発掘された出土品 .....		66
埴の城と館 .....		68
羽黒山城実測図 .....		73
埋蔵天然文化財 .....		74
石造物 .....		75
民家・古文書 .....		79
埴町の民家 .....		80
埴町の古文書 .....		82
工芸・民俗 .....		85
埴町にある工芸品 .....		86
埴町の絵馬 .....		87
埴町の祭 .....		88
埴町の民謡 .....		94
埴町の民話・伝説 .....		96
懐しの生活・農耕用具 .....		100
埴町文化財略年表 .....		102
<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">コ ラ ム</span> 文化財の保護について	32	
(一)	52	
埴町ゆかりの人々(二)	78	
(三)	84	



▲水田地帯

豊かな森林資源▶



▼こんにゃく畑





## 埜町の自然文化

◀ 滝沢の滝









●位置 東経140度24分  
北緯36度57分  
海拔 193.4 m  
(役場所在地)

●面積 210.86km<sup>2</sup>

●世帯数 3272戸

●人口 12128人  
(平成2年1月現在)



## 原始

埜町の原始時代は、計画的な発掘調査がされていない現状では正確を期し得ないが、各遺跡から採取された縄文土器には東北的性格を持ち、関東の影響をも抱合しており、新しい関東地域からの文化が東北に搬入される道として、縄文時代以降踏み固められた道があったことを示すものである。

昭和四十八年十二月、湯岐羽原谷地内で町道前田・上石井線の道路拡張工事中に、偶然土器が発見された。厚さ三〇センチの耕作土、その下六〇センチ程の有機質黒色土、道路面まで約一四〇センチは黄色粘土層から出土したものである。東側の断面には住居跡が画然と切り込まれた遺構が見られた。

この土器は、斜めの縄文を肩部より胴部全体に施文し、肩部より口縁部がわずかに直立して外反、底部一杯に焼成後の穿孔されたものと櫛目沈線の施文が施され、退化した姿であるが、釣手部の突起に蛇の文様とも考えられるものが見られる。

このほか、町内では久慈川を望む台宿や伊香の台地などで多数の縄文土器片や石器類が出土している。

縄文復元土器  
(湯岐羽原谷地遺跡出土)



### 常世北野



①徳林寺 | 木造薬師如来坐像・木造十一面観音菩薩坐像・仁王像・殿鐘 | ②八幡神社 ③八坂神社



### 東河内



①東河内遺跡 ②海蔵寺 | 木造開山任山良運坐像・涅槃図 | ③熊野神社



### 西河内



①西河内太鼓館跡 ②龍沢寺 | 木造阿弥陀如来立像・石造板碑供養塔・磐子・古鏡 | ③八幡神社 ④貝化石層



# 埧町の概要

## 立地

埧町は福島県の南端に位置して、東は阿武隈山系を経て茨城県に接し、西は八溝の山々を経て栃木県に接し、西約二七・一キロメートル、南北約一九・五キロメートル、面積約二一〇・八六平方キロメートルの自然の美しい町である。

町のほぼ中央をJ R水郡線と国道一一八号線が走り、阿武隈山系を水源とした渡瀬川と川上川が板庭地内で合して西流し、八溝山系に源を発する久慈川に大字埧地内で注ぎ南北に流れている。

人家は概して町内全域に散在しているが、大字埧が小規模ながら市街地としての形態を整えている他、八幡・川上・植田が大きな集落をなしている。

久慈川



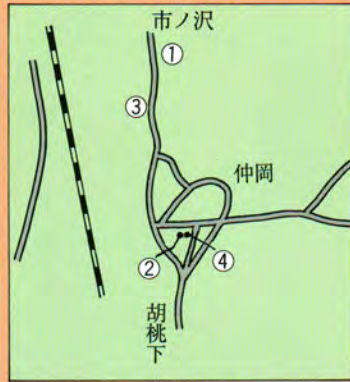
### 堀越



- ①堀越金井館跡②熊野神社



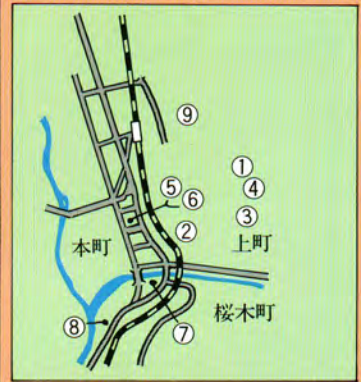
### 上渋井



- ①上渋井遺跡②上渋井薬師堂供養塔③熊野神社④石造板碑供養塔



### 埧



- ①羽黒山城跡②安楽寺 山門・木造如来形立像・鏡釘・銅製古鏡 ③愛宕神社 木造愛宕神像 ④出羽神社⑤陸奥代官埧陣屋跡 埧代官所旧址碑 ⑥子育て地藏堂 楠公絵馬・銅造地藏尊半跏像 ⑦向ヶ岡公園 桜・誕生冢古碑・鉄道記念碑・寺西神社再興碑・寺西神社・煙草神社・忠魂碑・熊野神社・養蚕神社・稲荷神社・聖徳太子・歌碑・石燈籠・田中貢太郎句碑 ⑧田中愿蔵刑場跡⑨山野神社



## 中世

鎌倉期の領有関係は不詳であるが、南北朝以後は、文治五年（一一八九）の源頼朝の奥州合戦の恩賞により、結城朝光に白河などが与えられ、当地域もその所領となった。十六世紀に入ってから、常陸佐竹氏の手が南から伸び、十六世紀末頃には、白河領全土が佐竹氏の勢力圏に編入される。この間、当町の主要な政治・軍事的拠点は羽黒館である。しかし白川氏・佐竹氏の本拠とはならず、当町域を含む高野郷の中樞は棚倉赤館であった。中世文書に出てくる当町内の地名は伊香、西河内…などである。

鎌倉時代から室町時代にかけて、追善や供養などの目的で作られた板碑は当町内には少ない。塙町の石造供養塔婆は、佐竹氏の影響と常陸国の仏教傾向が強かったと考えなければならぬ。佐竹氏が鎌倉新仏教である臨済禅を受け入れて以来、これを保護し、流布している。古くから山岳修験の聖地とされた八溝信仰とも関わりがあり、鎌倉中期迄の供養塔婆が石川氏、白川氏と比較して少数であり、鎌倉末期から南北朝期にのみ限定されることは前述のような背景があったのである。

板碑（上渋井）



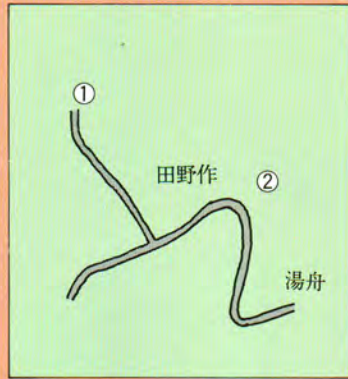
### 山形



- ①大畑遺跡 ②十殿神社 ③近津神社 ④八坂神社 ⑤湯舟観音堂 {木造聖観音菩薩坐像・絵馬} ⑥出羽神社 ⑦熊野神社 ⑧熊野神社 ⑨熊野神社 ⑩八竜神社



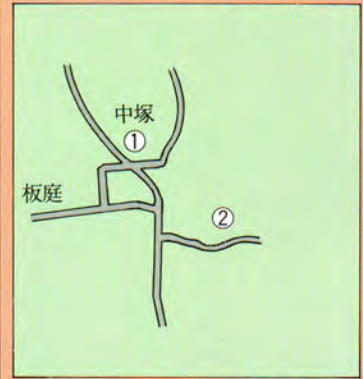
### 田野作



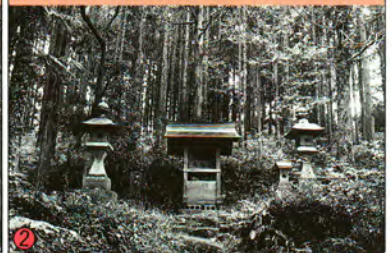
- ①弘法塚 ②八竜神社



### 中塚



- ①中塚館の岡館跡 ②於礼神社



# 古代

『日本後紀』の弘仁二年（八一）四月二十二日条に「廢陸奥国海道十駅更於通常陸道置長有高野二駅為告機急也」とある。「陸奥国海道（浜通り）の一〇駅が廃止され、かわって常陸に通ずる久慈川沿いの道に長有・高野の二駅が設置された。機急を告げんがためにこの措置がとられた」とあるのによれば、陸奥国府多賀城への連絡は海道經由よりも長有・高野を經由する方が早かったことがうかがえる。

また『延喜式』に本町に関係する記述として「高野に駅馬二匹をそなえること」、承平五年（九三五）の『和名抄』に『常世』『高野』の郷名が見える。

昭和四十二年七月、山林を耕地に造成中、直刀二振りと鉄鏃、鉄斧が出土（大字伊香・高野里古墳）した。古代の墳には、既に貴重な副葬品を埋葬することのできる人がいたのである。

高野里古墳



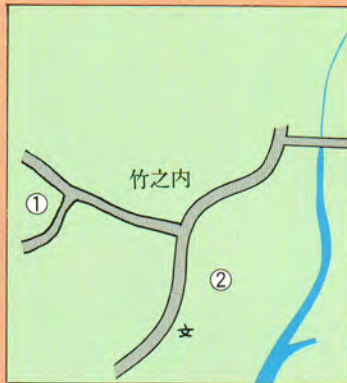
## 板庭



- ①板庭銚子館跡②巖島神社 | 木造弁財天立像



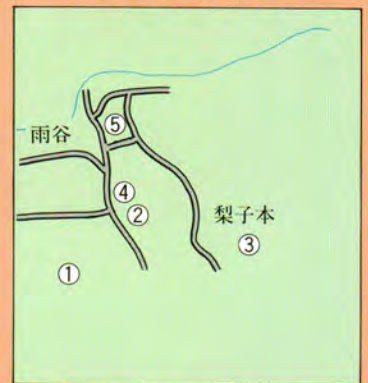
## 竹之内



- ①竹之内不動院 | 供養塔・碑石  
②稻荷神社



## 常世中野



- ①中野平館跡②天照皇太神社③八竜神社④常世観音堂 | 木造如意輪観音菩薩坐像・観音収蔵用厨子・扁額 ⑤道標



の一時期磐城平藩領となった村もあったが、慶応四年（一八六八）四月まで百四十余年間に、四五人の代官により支配された。代官所は慶応四年、奥羽鎮撫総督府が最後の代官多田銃三郎の退任願を認め、仙台藩に接收させたことにより終りを告げた。棚倉藩領の村々は、天明四年の支配替えのあった前記の村と、堀越、西河内、東河内、常世北野、湯船、山形、田代、大畑、前田、大蔵、湯岐、那倉、片貝の各村であった。

なお、太田資晴の移封後は上野国館林より松平武元が入封し、延享三年（一七四六）旧領館林に移封。遠江国掛川より小笠原長恭が入封。長堯、長昌と在封し、文化十四年（二八一七）肥前国唐津に移封すると、遠江国浜松より井上正甫が入封。家督を継いだ正春が天保七年（一八三六）館林に移封となり、石見国浜田より松平康爵が入封。康圭、康泰、康英と四代にわたり在封し、慶応二年（一八六六）武蔵国川越に移封すると、白河より阿部正静が入封したが、同四年の戊辰戦争に際して奥羽列藩同盟に参加。同年六月二十四日奥羽征討軍の攻撃を受け棚倉城は落城。丹羽長重の棚倉城築城（寛永元年・一六二四）以来阿部氏まで八家一六代の歴史は幕を閉じた。

寺西代官掛幅画



### 木野反



①熊野神社



### 湯岐



①羽原谷地遺跡②温泉鎮守八幡宮本殿③湯岐阿弥陀堂 |木造阿弥陀如来立像|



### 片貝



①十殿神社②片貝小学校 |門前碑石|



## 近世

豊臣秀吉の奥州仕置の後、関ヶ原合戦で豊臣側についた佐竹義宣が、慶長七年（一六〇二）出羽国秋田に移封されるまでその支配下におかれたのち、当地域をはじめとする南郷の地は幕府に収公され、幕府代官彦坂元正が慶長十一年まで支配した。これが、埴地方が幕府の直轄領となった最初である。

慶長八年、立花宗茂が、寺山館から二万石加増され赤館城主となり、元和六年（一六二〇）旧領筑後柳川に復した。当地域の村々は、近世初期から幕領として代官の支配するところと、棚倉藩によって支配される村とに分かれた。元和八年（一六二二）丹羽長重が常陸古渡から五万石で入封し、棚倉城の築城および城下町の整備がおこなわれ、当町域の旧村はすべてその支配下におかれた。寛永四年（一六二七）内藤信照が近江国より入封し、正保四年（一六四七）領内総検地が実施され、藩体制が確立された。内藤氏は、信照、信良、式信と三代七十八年にわたり支配し、宝永二年（一七〇五）駿河田中に移封するが、同地より太田資晴が入封し、享保十四年（一七二九）上野館林に所替えとなった時に、白川郡のうち六七ヶ村・二四、五九〇石余、その他常陸国多賀郡、陸奥国菊多郡・磐前郡などあわせて五万石余りが幕府に収公された。

初代の代官は岡田庄太夫で、古殿町竹貫に陣屋を開いたが、同年九月会田伊右衛門に代わった時、埴に代官所が開設された。上洪井、常世中野、下中塚、田野作、川下、川上の各村は天明四年（一七八四）に棚倉藩に支配替えされたが、埴、下洪井、竹之内、板庭、上中塚、木野反、台宿、伊香、植田、真名畑、上石井の各村は、幕末

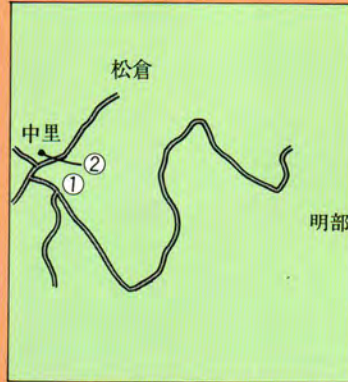
### 那倉



①十殿神社②熊野神社③雷神社



### 田代



①田代中里供養塔②北野神社



### 大蔵



①愛宕神社②金比羅神社③中村神社





# 現代

昭和二十三年、常豊村が町制施行して埴町と改称した。  
 昭和二十八年町村合併促進法が公布され、県の合併計画に基づき、昭和三十年三月十日、埴町と笹原村が合併して埴笹原町が誕生した。昭和三十年三月三十一日、埴笹原町に石井村と、高城村のうちの台宿、伊香、植田、真名畑が合併し埴町が誕生した。昭和三十二年に旧石井村の中石井・下石井・戸塚の三集落が分町して矢祭村へ編入され、昭和三十四年に棚倉町の一部を編入。昭和四十四年に矢祭町との境界が変更となり、現在の埴町が誕生した。



## 真名畑



- ① 荒屋廃寺跡 ② 真名畑宮田遺跡
- ③ 真藏寺 {木造地藏菩薩坐像}
- ④ 山幸神社 ⑤ 熊野神社 ⑥ 阿夫利神社



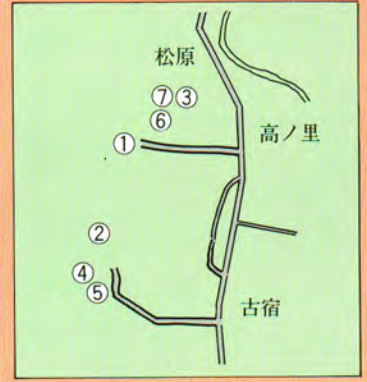
## 植田



- ① 中沢一里塚 ② 植田遺跡 ③ 植田薬師堂 {木造薬師如来立像}
- ④ 下植田薬師堂 {木造薬師如来坐像}
- ⑤ 稻荷神社 ⑥ 植田神社 ⑦ 熊野神社 ⑧ 天神神社



## 伊香



- ① 高野里古墳 ② 伊香油館跡 ③ 天照寺 {木造大日如来坐像}
- ④ 北野神社 ⑤ 古宿観音堂 {木造十一面観音立像}
- ⑥ 諏訪神社 ⑦ 高野神社



# 近代

明治初年には、戊辰戦争の最中である明治元年（一八六八）八月に磐城平民政局が設置され、同年十二月、当地域の全村が棚倉藩に交付、翌二年の版籍奉還により阿部基之助が藩知事となった。

明治四年七月廃藩置県により棚倉県所管となったが、同年十一月二日、合併により平県に所属、同月二十九日、平県は磐前県と改称された。

明治五年五月、第五大区の小四区から小七区に分属し、明治六年の改正で小三区、小四区と小六区、小七区に、明治七年の改正で小二区と小三区に属した。

明治九年五月福島県が成立。同年十二月の大小区改正により第一八区となり、明治十六年二月に川上村他一ヶヶ村、植田村他八ヶヶ村、東館村他一ヶヶ村の戸長役場にそれぞれ属した。

明治二十二年（一八八九）四月、町村制施行により常豊村（塙・下洪井・上洪井・竹之内・堀越・東河内・西河内・常世北野・常世中野）、笹原村（川上・板庭・中塚・田野作・田代・山形・大蔵・那倉・木野反・湯岐・片貝）高城村（台宿・伊香・植田・真名畑・茗荷・内川・関岡）、石井村（上石井・中石井・下石井・戸塚）が成立した。その合併には、戸数・人口・田畑面積・地価等の資料調査等により近隣町村を以て新しい村が生まれ、昭和三十年の町村合併まで続いた。

### 台宿



①米山砦跡 ②下稲沢遺跡 ③台宿南原遺跡 ④台宿一里塚 ⑤薬王寺 [薬師堂・木造薬師如来坐像・御詠歌絵馬・石造板碑・宥善上人墓碑銘] ⑥北野神社 ⑦熊野神社



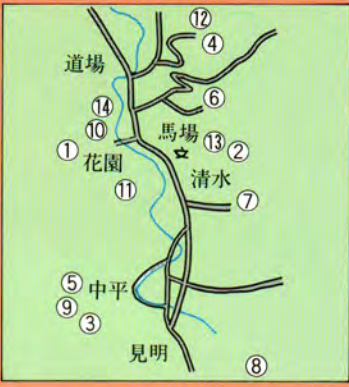
### 上石井



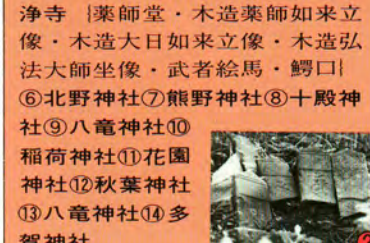
①宝泉寺 [木造大日如来坐像・須弥壇・石造板碑] ②八幡神社



### 川上



①川上孤屋館跡 ②川上長峰供養塔 ③中根遺跡 ④賢瑞院 [本堂・山門・木造釈迦如来坐像・木造地藏菩薩半跏像・須弥壇] ⑤東浄寺 [薬師堂・木造薬師如来立像・木造大日如来立像・木造弘法大師坐像・武者絵馬・鰐口] ⑥北野神社 ⑦熊野神社 ⑧十殿神社 ⑨八竜神社 ⑩稻荷神社 ⑪花園神社 ⑫秋葉神社 ⑬八竜神社 ⑭多賀神社





## 町指定有形文化財

### 古宿観音堂

埴町指定 昭和51年2月12日

所在地 大字伊香字古宿213

平安初期に編さんされた『日本後紀』の弘仁2年(811)4月条に「高野」の駅が設置されたと記されている。この「高野」は、伊香辺に比定されている(福島県史)。都から陸奥国府(宮城県多賀城市)へ通じた、古代の国道が設置され、中央の文化が、陸奥国に入る接点にあったのである。

この観音堂は、一面が4.85メートルの入母屋造りで、十一面観音を本尊とし、天井には寛保2年(1742)狩野益信の筆になる、墨絵の龍が描かれている。

『埴町の民話と伝説』によると、この地にい

た「朝日長者」が、この屋敷を宿とした旅人を殺しては、金銀を奪ったことから大罰があたり、次々と子供が死んでしまった。そこで長者夫婦は、諸国修行に出て、高僧から、御堂を建て供養することを教えられ、帰郷するや一夜のうちに御堂を建てて、朝日さし夕日さす樹の下に、漆千杯、朱千杯、黄金千杯を埋めて供養したと言い伝えのある御堂である。



## 県指定天然記念物

### 向ヶ岡公園の桜

県指定 昭和31年9月4日

所在地 大字塙字桜木町204-1

この公園は、寛政五年（1793）に名代官といわれた寺西重次郎が四民遊楽の地として築造されたと伝えられるもので、庶民の公園として古いものである。

桜は3株あって、樹種はシロヒガンザクラおよびシロシダレザクラに属する。

園内の西南側西部にあるヒガンザクラは、目通り幹周りが4メートル、幹は地上約2メートルで二つに分かれ、花は白色。同側南寄りのシダレザクラは、目通り幹周り3メートル、花は白色である。

北側の隅にあるシダレザクラは、目通り幹

周り3.5メートル、花は白色である。

これらの桜は、この類の地方的巨樹として有数のものである。



## 町指定有形文化財

### 湯舟観音堂

埴町指定 昭和51年2月12日

所在地 大字山形字桜下134

本堂は、調査によると、内陣の円柱四天柱上に禅宗様式の三ツ斗が残され、寛文（1660年代）の頃、廃寺高德院観音堂の移築と思われる。その後、元禄4年・天明6年に修築され、現在の堂は廃仏風潮の折にもかかわらず、明治2年方三間、宝形造、四周に擬宝珠つき高欄の切目縁を巡らし、正面格子戸は、擡り上げとして旧来の仏堂様式を受け継ぎ、当時としては、丁重な建築であった。天上裏の彩色画は、棚倉藩士関口松宇筆、寄進者は雨谷の荒川彦惣とある。

内陣本尊仏は、小型の厨子に納められ秘仏

とされてきたが、調査の結果、宝町初期の宋風様式を残す聖観音像で、当地方の数少ない貴重な仏像である。

本尊はまた、馬の守護仏とされ、馬産地だった当地方では、広く厚い信仰があり、年2回の縁日（旧正月・7月）には、遠近の参拝者で賑わった。本堂内外の数多くの絵馬は、地方稀な民俗文化財でもある。



## 町指定有形文化財

### 常世観音堂

埴町指定 昭和51年2月12日

所在地 大字常世中野字舟木原86

当地は、上代史に載る数少ない地名の常世郷である。このことから「常世観音堂」と呼ばれる。本堂は、西の耕地の中にあった廃寺に残されたお堂で、火災のため、天保9年(1838)再建され、大正9年(1920)この地に移されたものである。

屋根は宝形造り、堂の回りは横板壁で、柱は粽<sup>ちまき</sup>付き、台輪のある円柱で、隅柱には簡素な出組がある。内部は入念な作風で、結界内に祭壇と通りとを設け、中央来迎柱間に厨子を安置し、外陣に向けた中桁には、斗<sup>ます</sup>や木鼻をつけ、欄間には彩色の透かし彫りを配し、

腰部にも陽刻のある、はでな造りとなっている。外陣は格天井、中央に龍が、各格子には花鳥の彩色画が描かれている。掲額は、水戸学者で名筆家の立原翠軒の筆になるものである。

本尊の如意輪観音は、この地方には数少ない南北朝時代(1336~92)の仏像であり、箱型厨子に安置され、仙道二十二番札所の霊仏にふさわしい仏堂として営まれてきたものである。



## 町指定有形文化財

### 東 浄 寺 薬 師 堂

郷町指定 昭和51年2月12日

所在地 大字川上字薄久保33

いつの頃からか、ここ丘腹の地を聖地とし、現在の東浄寺が移されてきた。それ以前に、通称笹原郷の三薬師の一つとして尊信を集めた本薬師尊が、川向かいの地にあったが、この地へ移されたとの伝承がある。棟札及び堂内の掲額には、宝暦10年（1760）とあり、堂の歴史を物語っている。

本堂は、宝形造りの小堂ながら、工作は極めて念入りなものとなっている。まず外部を見ると、擬宝珠付きの高欄に、切目縁の回廊、正面階段には逆蓮柱が立ち、戸には折戸・格子戸が見られる。また繁垂木、粽付き出三

ツ斗の円柱や、中備えがあり、木鼻の彫刻と共に彩色・塗装された跡が見られる。内部の外陣には支輪付き格天井、その天井には極彩色画が施され、四天柱の欄間には、大彫刻が飾られてある。当初の内陣を守る結界の構造跡も見られ、珍しい仏堂の一つである。

これらには、後に手を加えられたものもあるが、町内の貴重な建造物である。



## 町指定有形文化財

### 台宿薬王寺薬師堂

埜町指定 昭和51年2月12日

所在地 大字台宿字大久保53

本堂は、延宝（1673～80）の昔、米山中興の祖と言われる宥善上人や、安永（1772～80）年間の義観上人らの布教等によって、八溝山をとりまく広域に『米山薬師信仰』が高まり、多くの信徒達の寄進により、寛政2年（1790）の春、建立されたと伝えられている。

本堂は、素木造りで、禅宗様式を加味した、この地方には珍しい壮大な造りである。屋根は宝形造りで、方三間、二重の疎垂木。柱は円柱や八角柱を用い、出三ツ斗で、頭貫上には台輪を回し、柱間の中備えにも組物がある。堂の三方は横板壁で囲まれている。回廊と天

井は未完成で、内部から斗栱ときょうが見える。堂内は拭板敷で、四天柱を境に内陣があり、腰高の祭壇となっている。

本堂は、米山山頂にある奥の院の祭殿として営まれたことから「御飯屋」の呼び名が残っている。四月祭り（春まち）と夏の終わりの八朔祭りは、米山祭りと称せられ、近郷近在より多くの人々が集まり、賑わいをみせていたという。





## 町指定有形文化財

### 銅造地蔵尊半跏像

埴町指定 昭和51年9月21日

所在地 大字埴本町45-2

台座銘に、宝暦三年（1753）4月21日、稲崎五右衛門発心、白坂長右衛門、伊香翠川五郎兵衛その他遠近篤志家の浄財により、宇都宮の戸室将鑑これをつくり、鑄造は佐野の長谷川弥市藤原秀膳とあるので建立由来の明瞭な仏像である。

高さ約2メートル、写真に見る如く、半跏の姿をもって、慈眼を垂れ温容を示す。破損も見られず町内唯一の鑄造仏である。

寛政年間（1790年代）寺西重次郎代官の尊信するところとなり、民風改善の拠り所とし、子育てを奨められたので、子育て地蔵尊と呼ば

れるようになった。現在なお地域住民の敬仰するところ、月の24日祭典が行われている。

最初建立された所は、地蔵院（真言宗小山松本寺）の境内で、明治の廃仏棄釈令により寺は衰微して、仏像は転々と移され、露仏の憂目をみられたが、昭和5年現在の地に、安置され今日に及んでいる。



## 町指定有形文化財

### 木造十一面観音立像

埴町指定 昭和51年2月12日

所在地 大字伊香字古宿213

本尊は、けやきの一本造りで、しかも高さ2メートルを越す大きなもの、当初は色彩を施された跡が見られる。素朴ながら地方人の工人による信仰上の彫刻と思われる。製作者、年代共に不詳なるも、町内の仏像では貴重なものである。

本尊は、堂内の格子戸の内陣におさめられているが、仏間としての不均衡が目立っている。これは堂の大修理の際の都合によるのか、又は、仏像完成後の臨機の処置のままにあったのではないだろうか。



## 町指定有形文化財

### 木造聖観音菩薩坐像

埴町指定 平成2年1月11日

所在地 大字山形字桜下(湯舟観音堂)

一木造 彫眼 素地仕上げ  
像高 52.1cm  
室町時代(15世紀)

宝冠を戴き、禅定印を結び結跏趺坐する、宝冠釈迦如来ともみられる。しかし宝冠正面に化仏をおいているのは、聖観音のお姿である。現在観音堂の本尊であり、聖観音と伝えられており、両手は後補であるので、現状では聖観音としておく。

両肘の張がなく、体軀は窮屈な感じを受ける。これは材の制約によるものと考えられる。目尻をつり上り気味にあらわし、口をしか

りと結んだ面長な顔貌表現には厳しさがうかがえる。また両肩が張り、襟の線がV字状なり、胸部の露出を少なくしているところなど、古様な表現もみられる。一本造で素地仕上げとし、厳しい表情、鋭さのある衣文の彫出など、八槻都々古別神社木造十一面観音立像に通じる特色が看取される。あるいは行者系の彫刻に分類されるかもしれない。この地方での造像と考えられ、地域的特色をもった像といえよう。この土地の特徴的な作風をもった像として、貴重な遺品である。



## 町指定有形文化財

### 木造如意輪観音菩薩坐像

埴町指定 平成2年1月11日

所在地 大字常世中野字舟木原(常世観音堂)

一木造 彫眼 漆箔  
像高 63.7cm  
南北朝時代(14世紀後半)

頭体の大部分を一材で彫出し、材を厚くしている構造は、在地の造像における一木造の像に近い。しかし切長の目に眉の弧線の長く伸びた顔貌には、すっきりと澄んだ表情がうかがえる。また頭部をやや右に傾け、一面六臂で、右足を立てた複雑な形相を破綻なく仕上げている技倆には、卓拔さがみられる。六臂の配置も崩れることなく、充実した構成を示している。技法には地方的な要素を含んで

いるが、表現には調和のとれた造形がうかがえる。中央の仏師の、土着化した様態をあらわしているようである。

県内では、時代的にある程度古く、造形的にも優れた如意輪観音の作例はあまりない。この像は作域の優秀性ととも、尊像の種類において稀少性もあり、二つの意味でより価値が高い。



## 町指定有形文化財

### 板 碑 (延文五年銘)

埴町指定 昭和54年4月13日

所在地 大字上澁井字寄居166

この板石塔婆は、頭部が三角形の山型に二条の横線が切り込まれ額部をなし、その下が板状となり、主尊の種子と年号とが刻まれている。高さおよそ94センチ、上下の幅・厚さとも若干の差がある。碑面には、福島県史によると、種子はバン（大日如来）に見え、年号は「延文五年三月庚子大才彼岸三日」とされているが、破損されて読みがたい。

右の型の石塔は、鎌倉・室町時代に限られ建立された供養碑で、通常板碑と呼ばれ、関東地方に多い。秩父産の青石造りのものは武蔵型板碑、または青石塔婆と称され整った形

をしている。

町内の竹之内・西河内にも数基ずつ残されているが、建立年月が明らかでなく、この碑は当地の歴史を知る貴重な文化財である。

延文5年(1360)は、南北朝時代の北朝の年号であり、もともとこの板碑は、通称『御堂下』という田の中に埋もれていたものをここへ移し、建て替えられたものである。



## 町指定有形文化財

### 木造地藏菩薩半跏像

埴町指定 平成2年1月11日

所在地 大字川上字寺下(賢瑞院)

寄木造 玉眼嵌入 彩色  
頂一左足下 46.8cm  
南北朝時代(14世紀後半)

左足を垂下し、右膝をたて頬杖をついたような気楽な姿である。このような姿の像は、鎌倉時代以降、宋風の影響を受けて鎌倉地方を中心にして多くつくられた。この形相には、鎌倉からの直接的影響がみられる。体軀は幅広く、ずんぐりした造形である。胸部の肉取は強く、衣文は太く深くうねるように大振に彫出される。頭体の根幹部を前後に矧ぎ合わせ、頭部を割矧ぐ技法は、南北朝頃の仏像に

しばしばみられる。形式化しながらも、洗練された作風をもつ。その形相とともに、中央(鎌倉か)系の仏師の作と考えられる。南北朝時代の中央仏師の作例として、美術史的に貴重な遺品といえる。同時にこの時代の、当地方と鎌倉地方との交流を示す具体的歴史資料として価値は高い。



**町指定史跡**

**向ヶ岡公園**

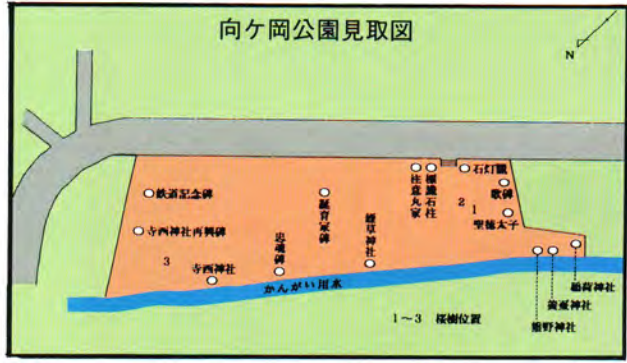
塙町指定 昭和51年9月21日  
所在地 大字塙字川向道上104

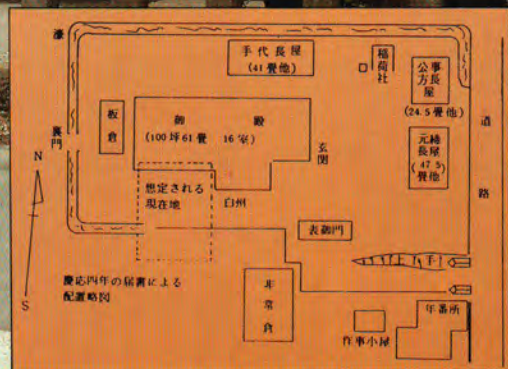
公園とはいえ、現有面積約818平方メートル程で、外部は石垣によって境界を限られている。これは、県指定天然記念物の枝垂桜保護のため整備されたもので、故金沢春友翁の尽力によるもの、南側に県道が開かれた明治18年以前は九ツ山への山続きの岡であった。

この公園は規模こそ小さいが、寺西代官によって、庶民のいこいの場として造られたもの。時に寛政5年(1793)であり、本邦の庶民公園の鼻祖と云うべきものである。

園内には、文政2年寺西代官の最たる治積を後世に遺す誕育家がある。

熊野社があるため、別名熊の森公園という。向ヶ岡とは、塙陣屋から見て名づけたものと、先師は云っている。





## 町指定史跡

### 陸奥代官塙陣屋跡

塙町指定 昭和51年2月12日

所在地 大字塙字本町45-2

陸奥代官塙陣屋は、江戸幕府が、享保14年(1729)2月、塙の近隣5万石余を直轄地とし、竹貫(石川郡竹貫村)に陣屋を開設し、同年9月、塙に陣屋が移された事により始まる。

塙に陣屋が移された理由は、塙の地が常陸太田街道・平潟街道沿いに位置し、久慈川流域の年貢米の輸送の便、更には奥羽外様大藩のけん制、或は、江戸防衛の重要な地点に位置するためと考えられ、慶応4年(1868)4月まで置かれていた。

塙陣屋の敷地面積は、5434平方メートル、

建物面積1134平方メートル余で、堀を巡らし、「表御門」をくぐると、「御殿」と言われる代官の住居を兼ねた建物が、南東に面して中心をなし、その北東には、「元締長屋」と「公事方長屋」、御殿真後ろに「手代長屋」と「物置」、南西に「板倉」があった。

また、表御門前には、「年番所」が置かれていた。



仏  
像



## 文化財の保護について

埴町文化財保護審議会

会長 藤田 清

終戦後四十数年、混乱と革新とを経てようやく今日の新時代を迎え、更に今後はかりしれない未来を迎えようとしている。その間、先人が遺された文化遺産というものには顧みる余裕も少なく過ぎ去り、ただただ次の時代を迎えることに追われているように思われる。遺された文化財について思いを巡らし、今後の文化の様相を想見し、それによって新しい文化の創造も考えられるものと言われている。

県としても文化立県を目指し、早くから文化センター、歴史資料館といった文化関係の施設を開設し、資料の収集や提供とを行ってきたとおり、近年になって博物館や美術館を開設し、前記同様、そして展示公開によって県民の文化意識の向上を目指しているが、各自治体においても文化並びに文化財について保護と活用との事業をそれぞれ進め、「村おこし」事業などによってその浸透を図っているのである。

本町においても昭和四十八年に文化財保護条例を定め、文化財の調査・発掘を進め、また重要文化財の指定事業を行ってきたが、昭和六十三年に条例を改正し、文

化財保護行政も新たな段階に進むことになった。

これらのことから広く町民の皆様へ、文化財の保護についてその資料となるものを提供し、文化財に対する興味と関心とを訴えるため、本資料を作成することとなった。

表現が仰々しくなってしまったが、特に構える必要はなく、道端のお地藏さんが落葉に埋もれていたら、それを払ってあげるとか、土の中に埋まっていた土器のかけらに関心を持つとか、身近なものへ関心を持つなど、残されたものへ興味を持ってもらうことが望まれるのである。

町民の関心や意識が高まることにより、町の文化レベルも押し上げられることは必至で、更に、広く文化に対する興味と関心の高まりが波及することを最終の目標として、その第一歩としたいと思うものである。

趣旨ご了解の上、本資料の活用をされ、町の文化の保護・保存について御協力をお願いするものである。

中通り地方の南北朝時代は、仏師乗円に代表されるように中央仏師の活躍した時代である。このような時代的特色は、塙町のこの時代の遺品にもみられるのである。賢瑞院の地藏菩薩半跏像は、左足を垂下し、右膝を立てて頰杖をついているようなお姿にあらわされている。このようなお姿の像は、当時、鎌倉地方を中心に中国の仏教美術の影響を受けて盛んにつくられていた。それが塙町に及んでいるのである。ここに鎌倉と当地との、直接的交流がうかがえるのである。乗円のような仏師が当地に下向



十一面観音坐像（徳林寺）

して、この像をつくったものかもしれない。あるいは鎌倉でつくられ、この地にもたらされたものかもしれない。しかしこの時代の中通り地方の造像界を一瞥するならば、鎌倉などの中央の仏師がこの地に下向し、この像をつくったことは十分に考えられるであろう。この像の中心部の技法構造をみると、頭体幹部通して前後に二材を矧ぎ、三道下で頭部を割り矧いでいる。この時代の、この程度の大きさの像ではよくみられる技法構造である。

常世観音堂の如意輪観音坐像は、一つの顔に六本の手、さらに右膝を立て両足裏をあわせて坐す、經典に説かれている通りの複雑なお姿をしている。このような複雑なお姿を、無理なく造形化している。六本の手の配置など、異様な感じはなく、むしろ自然な姿であらわされている。この像の中心となる技法構造は、一木造である。すなわち頭より像前半の大部分を一材で彫出し、背面に一材を矧ぐ。各手は、それぞれ肩や腋下に矧ぐ。賢瑞院像とはやや異なり、複雑なお姿にしては構造が単純化されている。しかしその作風には、洗練された巧みさがあり、かなりの技術をもった仏師の作と考えられる。中央の仏師が、この地に住みつ

いて、このような像を彫ったものかもしれない。一木造の技法構造には、地方的傾向がうかがえ、洗練された作風には中央的な要素がみられるのである。

## 二

室町時代に入っても、遺例は多くはない。ただこの時代になると、この地で作られた地方的な作風の像があらわれてくる。前の時代の遺例ほど、優れた作域を示す像ではないが、個性的な作風をもっており、よりこの土地に密着した、この土地の地域的な特色を具現した像といえるであろう。

徳林寺十一面観音坐像は、頭上面や持物なども含んで、すべて一材で彫出されている。徹底した一木造の像といえる。面長な顔貌には厳しさもうかがえ、大きく、うねるように彫出される衣の線は、賢瑞院地藏菩薩半跏像に通じる。南北朝時代の余風をとどめた像で、技法構造においても、常世観音堂如意輪観音像の一木造を、さらに一層押し進めたようなつくり方である。しかし前二像にくらべて、やや充実した造形に欠ける。これは造立された年代が、室町時代に入ること示しているのではなからうか。

湯舟観音堂の聖観音菩薩坐像も、頭頂よ

# 塙の仏像

はじめに

塙町では、下植田薬師堂薬師如来坐像のように鎌倉時代にまで溯る、古い作例がないわけではない。しかしこの像は破損がひどく、像の根幹部にわずかに当初の姿をとどめるにすぎない。数こそ少ないが、保存状態のよい遺品があらわれてくるのは、南北朝時代からである。そして作例が豊富になるのは、江戸時代に入ってからである。この町の大半の仏像は、江戸時代につくられたもので、このような時代的分布は他の市町村と同様な傾向を示している。塙の仏像を概観するにあたり、時代を追って叙述を進めていくのが、もつともわかりやすいと思われる。そこで鎌倉、南北朝時代の遺品から順次みていくことにする。

下植田薬師堂の薬師如来坐像は、現状の像高が八八・八センチメートルと、大きさも十分にある。さらに両体側をも含んで、頭体の大部分を一材で彫出し、前後に割りは、彫眼ちようがんとする技法も、豪快で古様な側

面をもつ。充実した肉身の造形から、鎌倉時代の造立と考えられるが、鎌倉時代も早い頃に位置するのではなからうか。像の根幹部のみが当初のもので、さらに頭頂部が失われるなど、保存は非常に悪い。しかし鎌倉時代の作例は他になく、この像のみが唯一、この町の仏像の歴史の古さを物語っている。

南北朝時代、特に中通り地方では、仏師乗円の活動に注目すべきものがある。乗円の出身については明確ではないが、鎌倉の仏師かとも考えられる。中通り地方には福島陽泉寺、二本松善性寺、古殿西光寺に二体の、計四体の乗円作の仏像が残されている。あと会津に一体、それに同じく乗円の師とも思われる道円の作品が会津にもう一体伝えられている。福島では乗円作の遺品が、合計で五体あるが、そのうちの四例が中通り地方に集中しており、その活動の主要な地域が中通り地方であったことが知られるのである。中通りにおける乗円の造像は、陽泉寺釈迦如来坐像に始まる。像内に



薬師如来坐像（下植田薬師堂）

書かれている銘文によると、この像は延文二年（一三五七）に円勝とともに造立を始めたことがわかる。そして最後の例が、古殿西光寺の地藏菩薩坐像である。この像は、応安七年（一三七四）につくられている。中通りにおける乗円の活動は、延文二年から応安七年まで十八年間に及んでいる。

り方は同様である。真藏寺像の衣の線などに、やや切れ味の良さがうかがえるのは、つくられた年代が海蔵寺像より古いことと、仏師の技倆の差とみられるであろう。さらに年代的にその中間に位置する東浄寺像は、江戸でつくられている。しかし技法構造は、頭部を一材で彫出し、前後に合わせた体軀に挿し込んでいる。基本的には、海蔵寺像に通じるつくり方である。当時の中央である江戸の仏師の彫刻である東浄寺像と、地

元の仏師の作である海蔵寺像は、つくられた年代が近いこともあるが、形式化した力のない作風は共通し、さらに基本的な技法構造もほぼ等しくしている。このように江戸時代になると、作者やつくられた土地が異なっても、作風や技法構造にそれほど大きな差はなく、均一化されてくるのである。それだけこの時代の仏像は、個性がないともいえるであろう。

#### おわりに

塙の仏像の歴史は、鎌倉、南北朝時代に溯る。そしてこの地に仏像をつくる活動が定着するのは、遺品からみれば南北朝時代になるであろう。中央の仏師によってつくられた賢瑞院や常世観音堂の諸像などが、この町の仏像の歴史の基盤を形成するものである。次の室町時代に入り、徳林寺像などへと作風が受け継がれていく。一方、湯舟観音堂像のように山岳に修行する僧侶のつくったものと考えられる像もあり、この地の地域的特色をうかがわせる。造像活動が土着化していったことがわかり、個性的な像が出現してくる。地方的、個性的な時代といえるのである。この地方化は江戸時代になると、より稀薄になってしまう。画一化が進み、個々の仏像において作風の系統を探ることも困難になる。しかし歴史資料としての価値は認められるであろう。そして庶民にもっとも仏像が浸透していったのも、江戸時代である。この時代、新たにつくられた仏像や、古い時代から伝えられてきた仏像は、村の人々により信仰され、守られ、現在に至っているのである。



衣の線の比較 (上・木造任山良運坐像)  
(下・木造地藏菩薩坐像)

り体軀の全体を一材で彫出している。そして脚部と両手は別材を矧いでいる。この像では、頭部に一部彩色をとどめているが、他は木の肌をそのまま生かしている。やはり表情には、厳しさがうかがえる。口をしつかり結んだ顔貌は、意志的な強ささえ感じられる。衣の線にも鋭さがあり、表面に何も彩色を施していないために、ノミの切れ味の良さがより強調されているようである。

このような作風は、天福二年（一一三三）造立の棚倉町八槻都々古別神社の十一面観音立像に通じる。この像は台座背面の銘文から、八溝山で修行した僧のつくったものであることがわかっている。ノミ跡を残した荒々しさの中に、気迫のこもった力強さがみられる。湯舟観音堂像も、八槻都々古別神社像のように、修行僧などによってつくられたものと推察されるのである。棚倉町と同様、埴町も八溝山の麓に位置する。八溝山は十一面観音の浄土であり、僧侶の修行する山でもあった。そのような山岳で修行する僧が、麓においてきて、修行の一環としてこのような像をつくったのではなからうか。そうするとこの像は、埴町の地域的な特徴を如実に示す作例といえるであろう。

徳川家康が征夷大將軍となった慶長八年（一六〇三）より大政奉還のあった慶応三年（一八六七）まで、二百六十年あまりを江戸時代と呼んでいる。この時代は、非常に長い時代で、仏像の遺品の数をもっとも多い時代でもある。この時代の仏像は、まったく定型化し、仏像彫刻としてみるべきものはあまりない。しかし数量が豊富であると同時に、伝来、造立の過程など、仏像の歴史的な変遷が比較的よく把握できる時代である。この時代は、それだけ仏像に関する他の資料が豊富であり、仏像が人々の生活に身近な存在であったことが理解されるのである。

菊池家や石井家の地藏菩薩像のように、一材でつくられ、素朴な作風の像がある。これらの像は、あるいは専門の仏師の作ではないかもしれない。在地の、素人に近い仏師のつくったものと考えられるのである。一方、寄木造の他の多くの像は形式化してはいるが、仏像のかたちはきちんと保っており、その意味では調和のとれた作風をもっている。真蔵寺地藏菩薩坐像は、記録によって植田の常福寺において、宝永七年（一七一〇）につくられたものであること

がわかる。作者は、栃木県益子の高田右近という仏師であった。

東浄寺の弘法大師坐像は、像内に納められている文書により、享保十九年（一七三三）につくられたものであることがわかる。さらにはこの像をつくるにあたって、金品を施した人が、棚倉町八槻の出身で当時江戸市谷に住んでいた、玉屋庄兵衛という人であることもわかる。この像は江戸でつくられ、庄兵衛の出身地である棚倉町の寺院に納められたのである。また海蔵寺の開山の肖像彫刻は、台座の墨書銘により、明和五年（一七六八）に岩瀬村の仏師「大原右京賀全」によってつくられたものであることがわかる。

これら三像は、すべて江戸時代中期頃の作である。しかしつくった仏師、つくられた場所など、それぞれ異なっている。真蔵寺と海蔵寺の両像の仏師は、真蔵寺像が栃木県の仏師で、海蔵寺は岩瀬村の仏師であった。真蔵寺像の作者が他所の仏師とすれば、海蔵寺像の作者は地元の仏師といえよう。つくられた年代に五十年あまりの隔りがあるが、定型化した作風は両者に共通する。技法構造は、多少真蔵寺像が細かいが、頭部を別につくり体軀に挿し込むつく

構造は、頭から体まで一材で彫出する。内刳は施さない。さらに結跏趺坐する脚部は、別に一材を刳いでいる。現在失われている両手及び袖口部は、それぞれ別に材を脚部材の上に刳いでいた。比較的単純な構造である。そして作風もまた、素朴なものである。体軀の造形は体の奥行が薄く、脚部とともに偏平な感じを受ける。衣の襞の彫出も浅く、直線的に処理されている。

この像は、もと真名畑村荒屋の十王堂に安置されていたと伝える。十王像とともにまつり、地獄からの救済を祈ったものであろう。なおこの像の脚部裏に、「十王堂」「文治二〇」「八月十〇」などの墨書がみられる。

文治二年（一一八六）などの年号が何を意味するのか明確ではないが、これらは後世に書かれたものであろう。

### 三、木造地藏菩薩立像

江戸時代

石井家 大字真名畑字向獵師

像高 三七・九cm

一木造 彫眼 現状素地をあらわす

円頂とし、衲衣は左肩を覆い右肩に少しかかる。両足先をそろえて立っている。現在、両手及び両足先を失っているが、各手には宝珠と錫杖を持っていたものと思われる。全体に磨滅しており、特に面部にそれ

が著しく、顔立など見分けがつかない。かろうじて円満なお顔の、輪郭がわかる程度である。

両手首と両足先を刳寄せるのみで、頭から体まで一材で彫出している。内刳はない。前述の菊池家の地藏菩薩像と同様、素朴な作風の像である。両肩より垂下する襟の線は直線的に処理され、彫りも浅い。また背面は何も刻まず、簡略な表現が目立つ。在地の仏師によってつくられたものと考えられる。

この像は、石井家の地藏堂の本尊である。この堂は八軒堂の一つといわれている。八軒堂とは、真名畑の開拓に八軒の家が入り、各戸が一堂を守ってきたことに由来するといふ。現在では、この像は、安産や子育てなどの信仰を集めている。



木造地藏菩薩坐像



木造地藏菩薩立像

一、木造大日如来坐像

江戸時代

天照寺 大字伊香字高野里

像高 四四・八cm

寄木造 玉眼嵌入 漆箔

宝冠を戴き、両手は胸前で、左拳の人差指を右の拳で握る智拳印を結び、右足を外にして結跏趺坐する。金剛界の大日如来である。大日如来は、密教における最高の存在である。他の如来とちがい、宝冠を戴き、

髻を結び、条帛、裳をつけた菩薩の姿であらわされる。

構造は、頭部は耳前を通る線で前後に二材を矧ぎ、三道の下あたりで体軀に挿し込んであるようである。体幹部は、前後に二材を矧いでいるようで、脚部は横に一材を矧ぐ。両腕は各別材で、それぞれ肩で矧いでいる。左肩よりかかる条帛や裳には、花文や網目文などの文様が描かれている。

天照寺はすでにすたれてしまい、現在はその跡地に堂宇が残されているにすぎない。この像はその中に安置されている。条帛や裳に文様を描くなど、丁寧につくられている。体の調和は程よく保たれているが、反面、形式化も著しく進み、造形的な力強さに欠ける。表情にも無気力がうかがえる。

二、木造地藏菩薩坐像

江戸時代

菊池家 大字真名畑字荒屋

像高 三四・〇cm

一木造 彫眼 素地仕上げ

円頂とし、衲衣は左肩を覆い右肩に少しかかる。現在、両手は失われているが、もとは宝珠と錫杖を持っていたのであろう。右足を外にして結跏趺坐する。



木造大日如来坐像





木造薬師如来立像

## 六、木造大日如来立像

東浄寺

大字川上字薄久保

江戸時代

像高 五三・五cm

一木造 彫眼 彩色

五智宝冠を戴き、天衣、条帛をかける。

両手は胸前で智拳印を結ぶ。金剛界の大日如来である。裳をつけ、両足をそろえて立つ。裳の中央には、花結びをあらわしている。

この像も頭から体軀を通して、台座蓮肉部まで一材で彫出し、内刳はない。頭頂部及び右手首先に小材を矧ぎ足している。像のやや前寄に木心をこめた材を使っているため、像前面中央部に台座まで通して干割が入っている。

前述の薬師如来像と同様な構造である。

その作風にも共通するところがみられ、量感に富んだ造形である。腰部以下に著しく量感をもたせている。そのため上半身との均衡を崩してしまっている。薬師如来像ほど調和は保たれていない。また衣の襞の彫出なども鈍くなっている。量感のある体軀、台座まで一材で彫出する技法構造など、薬師如来像との類似点が多い。おそらく薬師如来像に倣ってつくられたものであろう。

構造は、頭から体軀を通して台座まで一材で彫出し、内刳はない。彩色は頭髮を墨彩とし、衲衣部には唐草文などが描かれる。江戸時代の作例で、台座の一部まで一材で彫出するのは、あまり例がない。一木造の場合、一般的には、像本体のみが一材で台座は別につくる。

この像は、葉師堂の本尊である。普通、如来の頭部は螺髪をあらわすが、この像の場合には渦状に巻いて彫出している。簡略化した表現といえよう。顔貌は幅広く、首も太く、体軀は太造りにつくられる。小さい像ではあるが、量感のある造形である。両手袖口部が内に寄り、やや窮屈そうな姿をしている。これは材の制約によるものと思われる。



木造大日如来立像

#### 四、木造地藏菩薩坐像

江戸時代

真藏寺 大字真名畑字折戸

像高 三六・五cm

寄木造 玉眼嵌入 肉身部漆箔 衣部漆塗  
円頂にして髮際線をあらわす。左肩を覆い、右肩に少しかかる衲衣をつけ、左手に宝珠、右手に錫杖をとる。現在、錫杖を欠失する。地藏菩薩の普通のお姿である。

像根幹部の構造は、頭部を耳の後を通る線で前後に矧ぎ、襟の線で体軀に挿し込む。体軀は体側を通る線で前後に二材を矧ぎ、さらに両肩先の線で体側に各一材を矧いでいる。結跏趺坐する脚部は、横に一材を矧ぐ。複雑な構造を示しているようであるが、この時代の寄木造の像では、普通に行われる木の寄せ方である。

この像は、真藏寺の本尊と伝える。真藏寺は古い時代に建立されたといわれるが、江戸時代の初期に一時衰え、有照法印巡良房により再興された。有照は、天和三年（一六八三）に真藏寺に入っている。その後、明治初年に廃寺となり、現在では一堂を残すのみである。この像は、青年のような顔貌をしており、整った作風を示す。しかし形式化した表現は否定できない。記録によ

れば、この像は宝永七年（一七二〇）に植田山前住法印宥焉とその弟子によって、衆生利益のために造立されたものという。植

田山は植田の常福寺（現廃寺）のことで、仏師は下野益子村の高田右近で、常福寺においてつくられている。



木造地藏菩薩坐像

#### 五、木造薬師如来立像

江戸時代

東浄寺

大字川上字薄久保

像高 四八・三cm

一木造 彫眼 彩色

頭髮は肉髻の正面を中心に、髮筋を渦状に巻いて彫出する。左肩を覆い右肩に少しかかる衲衣をつけ、左手垂下して薬壺をとり、右手は胸前にあげ五指をのばす。両足をそろえて蓮台上に立つ。

覆い右肩に少しかかる衲衣をつけ、両手は膝上で左右を組んで禪定印ぜんじやういんを結んで、結跏趺坐する。

構造は、頭、体幹部ともそれぞれ前後に二材を矧ぎ、頭部は三道下で体軀に挿し込んでいるようである。両肩先の線で体側に各一材を矧ぎ、脚部は横に一材を矧ぐ。

当寺の記録によれば、この像はもとの本尊が大きく破損したので、旧本尊にならって新たにつくられたものという。その時期は、瑞潭の代と記されている。月山瑞潭大和尚は、当寺の第七世で、宝永三年（一七〇六）にこの世を去っている。そうするとこの像は、遅くとも宝永三年までにはつくられたものと考えられる。このように記録などによりつくられた年代がおおよそ把握できるのは、その時代の基準的な作例となり、貴重である。江戸時代中期頃の作風がうかがえるであろう。

### 九、木造地藏菩薩半跏像

南北朝時代

賢瑞院

大字川上寺下

頂—左足下

四六・八cm

寄木造

玉眼嵌入

彩色

円頂。白毫相をあらわし、耳朵を環状と

する。右肩、右腕に偏衫をかけ、腹前に裳の一部をあらわす。衲衣は左肩を覆い右腋下を通る。左手屈臂して膝上におき、第一、三、四指をまげて蓮台上の宝珠をとる。右手屈臂して右膝頭に肘をつき、五指を軽くまげて頬にあてる。左足を垂下し、右膝をたてて坐す。台座は、岩座上の蓮華座（後補）である。

構造は、頭体幹部通して両耳前から肩や

や前寄を通る線で前後に二材を矧ぎ、内刳し、三道下で頭部を割矧ぐ。両肩先より地付まで通して、各一材を体側に矧ぐ。脚部は、横に一材を矧ぎ、垂下する左足は膝下で、立てた右足は足首で、それぞれ別材を矧ぐ。彩色は後補で、白毫、左手持物の一部、左足先を欠失し、右手首の矧寄などがゆるむ。



木造地藏菩薩半跏像

## 七、木造弘法大師坐像

江戸時代

東浄寺

大字川上字薄久保

像高 二四・〇cm

寄木造 玉眼嵌入 彩色

真言宗を開いた、弘法大師空海の肖像である。真言宗の寺院には、しばしば安置される。左肩より袈裟をかける。現在、両手首より先を欠失しているが、当初は左手に数珠、右手に金剛杵をとっていたものと考えられる。

構造は頭部を首柄まで一材で彫出し、襟の線で体軀に挿し込む。そして頭頂より両



木造弘法大師坐像

頬を通る線で面部を矧ぎ、目に玉眼をはめ込むが、両玉眼は欠失する。体軀は前後に二材を矧ぎ、さらに両肩先を通る線で体側に各一材を矧ぐ。脚部は、横に一材を矧ぐ。定型化した作風の像である。しかしこの像には、像内の空洞部に文書が納められている。この文書によって、この像の造立の経緯が知られるのである。この像は、棚倉領八樹村（現棚倉町八槻）出身で江戸に住んでいた玉屋庄兵衛という人が、諸天、父母などの恩に報いるために、享保十九年（一七三四）に造立し、郷里の寺院に納めたものである。玉屋庄兵衛の出身地は八槻村で



木造釈迦如来坐像

## 八、木造釈迦如来坐像

江戸時代

賢瑞院

大字川上字寺下

像高 六七・三cm

寄木造 玉眼嵌入 漆箔

当寺の本堂本尊である。すでに形式化し、表現に固さがみられるが、螺髪を一粒一粒刻むなど、丁寧につくられている。左肩を

先を欠失し、手指のかたちがわからない。そのため詳しい尊名を知ることはできないが、両腕の配置や像容から考えて、智拳印ちけんいんを結ぶ大日如来と思われる。

構造は、頭部を一材で彫出しているようであるが、漆箔に覆われてよくわからない。面部には別材を矧ぐ。体軀は前後に二材を矧ぎ、さらに背面に左右に二材を矧いでいる。これによって、体軀の奥行を増している。脚部は横に一材を矧ぎ、両腰脇に各三角の材を矧ぐ。両腕は、それぞれ肩、肘先、手首で矧いでいる。

目や鼻、口を顔の中心に寄せ、かわいらしい穏やかな表情につくられる。また両膝にかかる衣の襞ひだは、左右各四本ずつ刻まれ、型にはまった造形ではあるが、左右の均衡がきつちりと保たれている。

## 十二、木造如意輪観音菩薩坐像

南北朝時代

常世観音堂 大字常世中野字舟木原

像高 六三・七cm

一木造 彫眼 漆箔

垂髻。天冠台を彫出し、正面と両側面に花形飾をつける。天衣、条帛をかける。一面六臂で、現状では持物として蓮華しか



木造如意輪観音菩薩坐像

残っていないが、もとはそれぞれの手に宝珠、法輪、念珠などをとっていたものと思われる。首をやや右に傾け、右膝を立てて両足裏を合わせて坐す。

構造は、木心を像前面にはずした一材で、頭体通して地付まで像前半の大部分を彫出し、背面より内刳を施し、背面には一材を矧ぐ。脚部は、横に一材を矧ぐ。その他各手はそれぞれ肩部や腋下に矧ぎ、右足部も

別材を矧ぐなど細部に材を矧いでいる。手や右足、右腰脇などの各矧寄せがはずれ、漆箔も後補で、保存状態は良好とはいえない。



木造薬師如来坐像

## 十、木造薬師如来坐像

江戸時代  
薬王寺 大字台宿字大久保

像高 八三・〇cm

寄木造 玉眼嵌入 漆箔

粒状の螺髪を彫出し、肉髻珠、白毫相を

あらわす。これらは水晶をはめ込んでいる。

左肩を覆い右肩に少しかかる衲衣をつけ、

左手は膝上におき五指をのばし、右手は胸

前にあげ同じく五指を軽くのばす。左手に

は薬師如来であることを示す薬壺をのせて

いたが、現在それは失われている。



木造大日如来坐像

頭部は両耳前を通る線で前後に二材を矧ぎ、三道下で体軀に挿し込む。体幹部は、前後に二材を寄せる。脚部は横に一材を矧ぐ。その他、細部に小材を矧いでいるが、像の中心部は一般的な木の寄せ方をしている。

この像は、もと当寺の客殿の本尊であったが、現在では薬師堂の本尊となっている。

この町の仏像では、比較的大きな像である。

しかし作風は、江戸時代の定型化したものである。

頭部が前傾し、横からみると顔貌

は両頬の肉付がそがれたようになり、平板

な印象を受ける。平板な印象は体軀の造形

にも通じ、像の大きさの割には迫力に欠ける。

## 十一、木造大日如来坐像

江戸時代  
宝泉寺 大字上石井字仲花

像高 四六・二cm

寄木造 玉眼嵌入 漆箔

銅製透彫の宝冠を戴き、左肩より条帛を

かけ、裳をつけ右足を外にして結跏趺坐す

る。菩薩のお姿である。現在、両手首より



木造阿弥陀如来立像



木造聖観音菩薩坐像

螺髪を細かく彫出し、左肩を覆い右腋下を通る衲衣と、右肩にかかる偏衫をつけて立つ。右手首より先を欠失しているが、左手が残っており、第一指（拇指）と第二指（人差指）を捻じているのがわかる。これによってこの像は、来迎印を結ぶ阿弥陀如来と考えられる。

構造は詳しくはわからないが、両足のつけ方がやや変っている。両足首より先をそれぞれ別に彫出し、像底部に短ぎ付けている。普通、足首より甲の半ば頃まで体幹部材より彫り出し、両足先のみを短く。

肉髻部は椀形をなし、螺髪も細かく整っており、穏やかなお顔である。しかし体に奥行がなく、側面からみると偏平な印象を受ける。襟の線なども形式的な固さが目立つ。

この像は、もと干泥村の長泉寺の本尊であったという。長泉寺はすでに廃寺となり、この像は一時小田川村（矢祭町）法林寺に移されていたが、昭和二十六年に長泉寺の旧跡である現在地に一堂を建て安置したという。

## 十二、木造如来形立像

江戸時代

安楽寺 大字塙字上町

像高 四九・〇cm

寄木造 玉眼嵌入 漆箔

現在、この像は両手首より先を欠失しており、詳しい尊名を知ることはできない。肉髻相をあらわし、螺髪を彫出し、水晶製の肉髻珠、白毫珠をつけている。左肩を覆い右腋下を通る衲衣と、右肩にかかる偏衫をつけ、両足をそろえて立つ。

構造は、頭部を前後に矧ぎ、三道下で体軀に挿し込んであるようである。漆箔が厚く施され、このあたりの構造はよくわからない。体軀は前後に二材を矧ぎ、両肩先より各袖先まで通してそれぞれ一材を体側に矧いでいる。さらに細部に小材を矧いでいる。

記録によれば、当寺は領主佐竹義重の寄付により、常陸国那珂郡常福寺第九世空誉玉泉上人を開山とし、天文二十三年（一五五四）に建てられたといわれる。しかし当寺には創建当初に溯る遺品はなく、この像もつくられた年代はずっと下る。技巧的で、一見調和よく彫刻されているようであるが、お顔の表情などは無気力に流れ、形式化も



木造如来形立像

進んでいる。

## 十四、木造聖観音菩薩坐像

室町時代

湯舟観音堂

大字山形字桜下

像高 五二・一cm

一木造 彫眼 素地仕上げ

前面のみの宝冠を戴き、宝冠正面を龕形に彫り窪め化仏（欠）をおく。左脇腹に僧祇支をあらわし、背面より右肩、右腕に偏衫をかける。衲衣は左肩を覆い、右腋下を通る。両手屈臂して膝上におき、左右重ねて禅定印を結び、右足を上にして結跏趺坐

する。

構造は、髻頂より宝冠を含め、体軀を通して地付まで、像のほぼ中心に木心をこめた一材で彫出する。内刳はない。脚部は、裳先をも含んで横に一材を矧ぐ。両手は一材で彫出し、各袖口に矧ぐ。両手及び脚部は後補で、宝冠化仏を欠失する。

## 十五、木造阿弥陀如来立像

江戸時代

湯岐阿弥陀堂

大字湯岐字上平

像高 四八・五cm

寄木造 玉眼嵌入 漆箔



薄い感じを受ける。やはり体の奥行がなく、正面では一応すっきりと整った表現をみせているが、彫刻としての力強さに欠ける。

## 十八、木造薬師如来坐像

江戸時代

徳林寺 大字常世北野字赤坂

像高 三八・八cm

寄木造 玉眼嵌入 漆箔

肉髻部は腕を伏せたようにあらわされ、螺髪は粒状に細かく彫られる。左肩を覆い右腋下を通る衲衣と、右肩にかかる偏衫をつける。左手を膝上におき、薬壺をとっていたが、現在ではその薬壺が失われている。右手はあげて五指をのばす。左足を外にして結跏趺坐する。



木造阿弥陀如来立像

構造は、頭部は前後に二材を矧ぎ、三道下で体軀に挿し込んでいるようである。体軀は前後に二材を矧ぎ、さらに両肩を通る線で体側に各一材を矧いでいる。脚部は、



木造薬師如来坐像

この像は、当寺の本尊である。棟札によると、当寺は正徳五年（二七一五）に建てられた。しかし大きな損壊を受け、天保十二年（一八四二）に再建されている。この像は、円満なお顔に、体軀の奥行も十分にあり、安定感に富んでいる。衣の襷も形式化しつつ、整理されて表現されている。当寺の建てられた、正徳五年頃につくられたものと考えられる。

十六、木造開山任山良運坐像

江戸時代

海蔵寺 大字東河内字五郎内

像高 三八・八cm

寄木造 玉眼嵌入 彩色

禅宗では祖師、先徳の肖像を尊重し、師より教えを受けたことのしるしとした。これらの肖像を頂相と呼び、鎌倉時代以降、禅宗の興隆とともに多くの彫像や画像がつけられた。この像は袈裟をつけ、曲条といわれる椅子の上に結跏趺坐する。そして曲条の下に裳裾を長く垂らし、頂相の特徴的表現をみせている。曲条の裏に墨で銘文が書かれ、造立年代やこの像をつくった仏師などが知られる。それによるとこの像は当寺の開山の肖像で、明和五年（一七六八）に岩瀬郡柱田村（現岩瀬村柱田）に住んでいた仏師「大原右京賀全」によってつくられたものであることがわかる。その他、この像の造立にあたり、金品を施入した人々の名などが記されている。

頭部を一枚で彫出し、前後に二材を合わせた体軀に挿し込んでいる。お顔は写実的に表現されているが、形式的な作風は否定できない。しかし江戸時代の岩瀬地方の仏師の作であることがわかり、当地方の基準

的な作例となるであろう。

十七、木造阿弥陀如来立像

江戸時代

龍沢寺 大字西河内字龍ヶ沢

像高 六一・三cm

寄木造 玉眼嵌入 漆箔

当寺は縁起などによると、八幡太郎義家が建てたという。天喜元年（一〇五三）に建てられたというから、その歴史はかなり古い。しかしこの伝承を裏付けるような遺品はない。明治三十五年（一九〇二）に罹



木造開山任山良運坐像

災し、この像は罹災後、常世北野村八幡の光明寺より移したものと伝える。

小粒の螺髪を彫出し、右手をあげ、左手を垂下して、それぞれ第一指（拇指）と第二指（人差指）を捻じ、来迎印を結んでいる。構造は頭部を前後に矧ぎ、襟の線で体軀に挿し込む。体軀は前後に二材、さらに両肩より袖先まで通して各一材を体側に矧いでいる。現在、漆箔が剥落し、右手の指先なども一部失っている。

穏やかなお顔をしているが、湯岐阿弥陀堂阿弥陀如来立像と同様、側面からみると

素朴な技法構造を示す。しかし作風には地方的な素朴さはみられず、お顔や衣などをきちんと彫っている。湯舟観音堂聖観音坐像ほどではないが、面長なお顔には厳しさがうかがえる。側面では体の奥行もあり、体軀や脚部をめぐる衣の襷は、太く、ゆったりと彫出され、南北朝時代の仏像にみられるような表現もっている。しかし背面は、かなり簡略化されており、実際につくられたのは室町時代に入るのであろう。

## 二十一、木造薬師如来坐像

鎌倉時代

下植田薬師堂 大字植田字下植田

像高（現状） 八八・八 cm

彫刻造 彫眼 彩色

この像は、割矧造わりはぎぞうという技法でつくられている。すなわち頭体の大部分を一材で彫出し、その後、体側を通る線で前後に割り離し、像内を削り抜いている。さらに脚部は、横に一材を矧いでいる。脚部、両肘より先は、すべて後に補われたもので、結局、頭体の中心部のみが当初のものである。破損がひどく、頭部や首、腰のあたりはすべて腐って一部失われている。

衣の表現には穏やかさがみられるが、幅

広の顔貌、胸部の肉取には緊張感があり、鎌倉時代に入ってつくられたものと考えられる。保存状態は悪いが、今のところこの像は、埴町では最古の遺品といえる。この像は、旧常福寺の本尊と伝えられている。常福寺は真言宗の大寺であったようであるが、明治十三年に廃されてしまった。そして

てこの寺と隣接してあった教広寺という時宗しよんの寺（明治初年に廃される）の跡地に一堂を建て、そこにこの像以下の常福寺の諸像を移したのである。それが現在の下植田薬師堂であるが、この堂もかなり荒廃している。

（福島県立博物館学芸員 若林 繁）



木造薬師如来坐像

## 十九、木造薬師如来立像

江戸時代

植田薬師堂 大字植田字中ノ内

像高 六五・八cm

一木造 玉眼嵌入 彩色

両眼を欠き、左手指先や両足先が一部失われ、彩色も剥落がひどく、保存状態は良好とはいえない。さらに現在の彩色は、後で施されたもので、それが厚く像を覆っており、全体に鈍い表現となっている。

粒状の螺髪を彫出し、左肩にかかる衲衣と右肩を覆う偏衫へんさんをつけ、左手を垂下し、右手をあげて立つ。薬師如来の持物である薬壺は失われている。

構造は、基本的には頭体の大部分を一材で彫出し、背面より像内を削り、そこに板を当てている。一木造であるが、一木の割



木造薬師如来立像

には量感に乏しく、体軀が偏平となっている。また衣の襞も直線的で、変化がない。江戸時代の形式化した作風を示している。

薬師堂に寛政六年（一七九四）の棟札が残されている。それには、この年に薬師如来をこの堂に納めたことが記されており、この像の造立もその頃と考えられる。なお薬師堂は、もこの堂の南にあった観音寺という寺の一堂であった。観音寺は、すでに廃され今はない。

## 二十、木造十一面観音菩薩坐像

室町時代

徳林寺 大字常世北野字赤坂

像高（現状）三〇・八cm

一木造 彫眼 彩色

垂髻及び垂髻上の仏面を失っており、天



木造十一面観音菩薩坐像

冠台上に一列に九面を配す。正面の顔を入れて十一面となる。また天冠台正面中央には化仏立像をおく。左肩を覆い右肩に少しかかる衲衣をつけ、左手に水瓶すいびょうをとり、右手は膝上におき五指をのばし、結跏趺坐する。

構造は、垂髻部に別材を矧ぐのみで、頭上面や左手持物をも含んで、頭体通して一材で彫出する。首よりかける銅製の胸飾じゅなごりは、後世につけられたものである。また彩色なども、後に施されたものかもしれない。

頭体通して両腕まで一材で彫出しており、

# 建造物



## 塙町ゆかりの人々（その一）

## ● 宥 善

宥善上人と称され、米山山頂に薬師尊の山寺を開山し、それ以前の山岳修行所と見られた山寺を、江戸時代を通して、地方きつての霊山、霊所とする基礎づくりをし、その後、数多あまたの信仰者を集め、中興の祖とされた。

亡くなられて百余年後、台宿に壮大な薬師堂が建立されるほどの遺徳で、毎年の春の祭礼や夏の終りの八朔祭といった大衆のための信仰慣例を残す基礎をなした。又、その詳細が碑文として残るほどの著名な僧侶であった。

その業績を追うと、当時のこの地方としては早い時期にその徳により塙の秦家から梵鐘の奇進を受け、米山山上より鳴り響かせたとある。その鐘銘（記録あり）は、宥善の作であり、又、その内容で、米山の由来を、遠く越後の米山薬師に求め、同じ内容としていたことから立派な学僧であったことがうかがえる。

当時の檀家制による寺院の維持ではなく、ひたすらの修行寺として、その生涯を山頂で布教教化に過こす生活を、晩年には、真言密教の教旨に従い、入定を果たしており、後世にその影響を残している。その神秘的な遺徳が、前記のような追慕事業となり、信仰山寺として、その名を遠近に拡大した。

その入定は貞享二年（一六八五）八月廿一日、六十二歳とある。

## ● 秦治右エ門

秦なる姓は、上代の秦は氏や秦野氏を思わせるが、塙では何時の頃からなのか、その資料がない。

その祖と思われる方に、「秦左衛門尉殿」とした八槻文書（応永三年 一三七〇）にあり、又明治四十年代の初め、塙の耕地整理に際し、所有地より近世以前の武具、装具などが出土し、早くより塙の開発に当たっていたようである。

徳川初期、地代官に秦治右エ門の記録があり、棚倉の立花宗茂が、元和五年（一六一九）柳川へ転封、次の丹羽長重が封ぜられる同八年までの三年間就任している。そのほかそれ以前の慶長十一年立花領以外の幕領を支配したとすることや、更には元和元年大坂役後、幕臣河西夕雲なる方と共に、棚倉領外の代官を勤めたとする記事もあり、丹羽氏の移封後も、寛永四年（一六二七）、次の内藤氏の転入まで塙に在任のまま南郷の代官を勤めたこともあるほど、幕府初期の地方行政にあたった人物であり、それを証する幕閣よりの贈物の文書もある。以後累代治右エ門を称し、塙三村の庄屋・名主を勤め、代官陣屋設置後は、年番名主の顧問役として行政に関与し、又、後期の社寺への奇進・造営などに尽くされた方も出ている。

## 二、賢瑞院観音堂(湯舟観音堂)

所在 大字山形字楼下

建立 江戸初期(明治二年大修理)

方三間(四・二四メートル四方)、宝形造り、茅葺き。

町の東方、天神川に沿った丘腹の木立のなかに建ち、湯舟の観音堂の通称で呼ばれる。堂の由緒はあまり明らかでなく、現在は川の下流の賢瑞院に属し、湯舟部落で管理している。

擬宝珠付きの高欄をもつ切目縁を四周に回らし、正面は階段のみで向拝を略する。身舎の軸部は角柱で、板溝を刻んだ横板壁張り、正面三間だけは摺り上げ板戸を開く。軒は一重の大疎垂木だけで軒組を省き、柱上には直接桁を載せごく簡素な構造である。

堂内は前通り二間を拭板敷きの外陣として格天井、格間には彩色画を描く。また、奥一間通りの内陣は結界で隔てて祭壇を設け、その中央には方一間・宝形造りで円柱と出組をもつ小型の厨子を安置する。室町期の作とも伝えられる聖観音像を納めているこの厨子は、屋根の破損がとくに著しい。

この遺構は外陣の格天井の画賛の記載からみると、主要部分はすべて明治二年(一八六九)の建立であるとみられる。ただし、内陣境に立つ四天柱(円柱)二本は、天井付近で遊離したままの柱頭の禅宗様三つ斗などからみて、前身建物の遺構であることは確かである。したがって、江戸初期ぐらいの時期に建てられたまま、壇上に安置した厨子も傷むほど破損していた仏堂を、明治二年に至って、内陣境の円柱二本だけを残して簡略な形式で改築した、という経過になるのだろうか。



湯舟観音堂内陣境

なお、堂の内外に掛けられた絵馬の類は多く、古くは文政年間(二八二〇頃)のものから保存されている。

## 三、北野神社本殿

所在 大字川上字繕

建立 宝暦四年(一七五四)

方一間(間口一・五二メートル、奥行一・三五メートル)、流造り、鉄板葺き(もとは柿板葺き)。

川上地区を南北に流れる川上川東岸の丘腹に建つこの地区の鎮守社で、大正年間神社から東白川郡役所宛出された「神饌幣帛料御指定願」の記述では、永正六年(一五〇九)京都北野天満宮から勧請されたものであると伝えている。

現存の本殿は切石一重基壇上に建ち、向拝の三方には切目板敷きの浜床を回らす。刎高欄を付した身舎四方の切目縁の腰には、縁束の束頭に斗拱を組むほか、縁貫の貫端にも木鼻を飾るなど、浜床両側の高欄とともに下部からいねいな細工が施されている。軒は二重の繁垂木を円柱上の絵様肘木を用いた出組で受け、中備の墓股上にも斗拱を組む。また、妻にも笈形付きの大瓶束

# 一、八幡宮本殿



湯岐八幡宮本殿側面

所在 大字湯岐字湯岐

建立 文化五年（一八〇八）

方一間（間口一・三メートル、奥行一・

三メートル）、入母屋造り、鉄板葺き

（もと柿板葺き）、唐破風向拝付き。

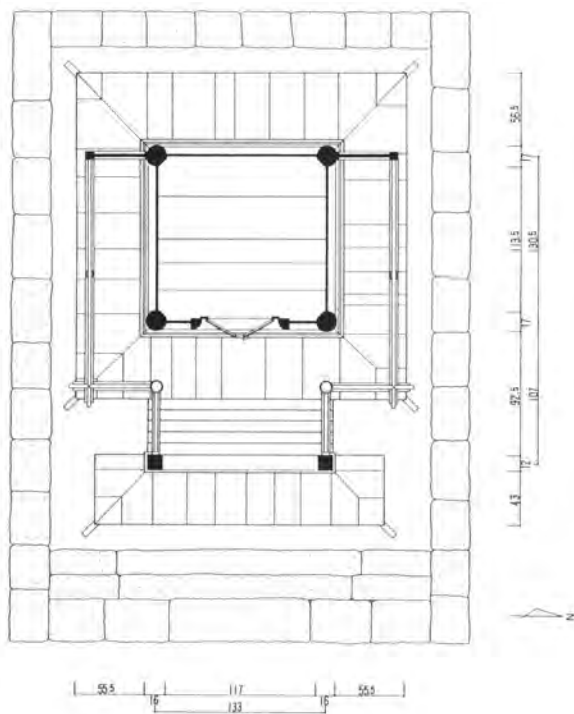
町の東南方を流れる湯川の谷合いに展開する湯岐温泉の集落東方の崖上に建ち、温泉鎮守八幡の通称がある社殿である。

四方には刎高欄を付した切目縁を回らし、その左右には脇障子、正面を除く三方は円柱に板溝付きの横板壁を張り、向拝にも登り高欄を付けてその前方には厚い浜床を置く。軒は二重の扇垂木とし、台輪を回らし

た三手先の詰組でこれを支える。

とくに目立つのは軒隅の斗栱と腰組であろう。前者は三つ斗それぞれから肘木を送り出して詰める形の工夫された技法を採用し、後者も地長押から縁桁の間を三手先の派手な組物で詰めている。

誉田別命を祭神とするこの神社の創立や由緒についてはあまり明らかではないが、現在の本殿の建立については保存中の棟札の記載によって文化五年（一八〇八）であることが判明する。この棟札にはほかに、「上村、中村、車村、前田村」など付近の



湯岐八幡宮本殿平面図

各旧村の大工棟梁名や「片貝村、福田村、仁井田村（現・北茨城市）」などの大工名、「大津村」の大工後見人名などの記載も見え、工事に当って広く工人が集められた状況や後見人まで添えられた入念な工事であったことが察せられる。

のち、明治三十八年（一九〇五）に修理されたほか、昭和三十五年には鉄板葺きに改められて（いずれも棟札あり）、高欄や脇障子もこの時交換されたらしい。現状は近年施したと思われる原色ペンキが全体を覆って、感じをひどく損ねている。



目縁を回らし、正面中央一間の階段両側には逆蓮柱を飾る。

軸部は現在正面中央一間を折戸、両方の端の間ははめ殺し格子戸、両側面は各々前一間を引違戸とするほかは背面まで豎板壁であるが、開口の位置や建具形式は必ずしも旧形を保っていない。軒は一重の繁垂木を六枝掛けとし、粽付きの円柱上には台輪を回しているが、軒の出三つ斗や中備の平三つ斗の形は和様である。

堂内は前一間通りが畳敷き（もと、拭板敷き）で、支輪を付けた格天井の外陣とし、格間には彩色画を描く。和様の組物をもつ四天柱の線で区画される内陣境は、もと三間とも結界で閉されていたと伝えており、



東浄寺薬師堂外観

その痕跡も残すが、現在はすべて開放されている。奥一間通りの内陣は拭板敷き・竿縁天井で、中央奥の一間には和様須弥壇を

造作し、薬師如来を祀る厨子を安置する。

この堂の建立を証する記録の類は保存されていないが、外陣の小壁に掲げて保存している武者絵の画賛を根拠とすれば宝暦十年（一七六〇）以前ということになる。

なお、外廻りの四隅や中央および内陣境の四天柱などに取付けられた獅子や象などの木鼻は明らかに後補であり、わずかに、背面北西隅の木鼻だけが旧形を伝えている。

## 五、賢瑞院本堂

所在 大字川上字寺下

建立 宝永七年（一七二〇）

間口一二間（二三・九メートル）、奥

行八間（一五・六メートル）、寄棟造り、

セメント瓦葺き（もと茅葺き）。

河上山賢瑞院は、町の東方を流れる川上川東岸丘腹に建ち、文亀二年（一五〇二）の創立と伝える曹洞宗の寺院である。

本堂は南北に長い寺域の北端近く、一段高い位置に南面して建ち、比較的規模は大きい。向拝とうは付されていない。

外廻り軸部は角柱で、背面を真壁で閉鎖するほかはすべて引違戸（もと、障子戸）で開放する。軒は一重の化粧垂木、軒組は全く施さず軒桁に柱直付けである。

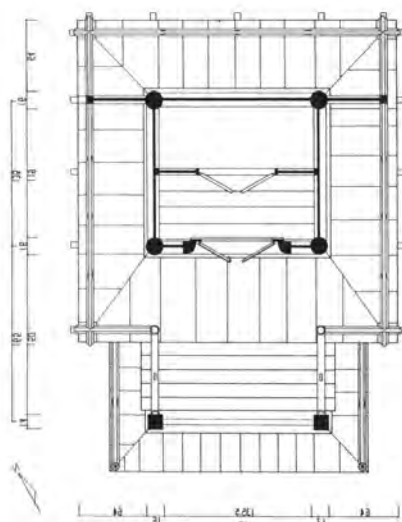
堂内は前段一間通りが土間縁、その奥一間通りが縁高約一メートルの切目縁、さらにその奥三間通りが畳敷きの外陣通り、最奥の三間通りが拭板敷きの内陣通りである。この内陣通りと・外陣通りは東西両端に幅一間の切目縁を設けるほか、四室列八室に仕切られ、中央西寄りの一室を内陣とする。



賢瑞院本堂・外陣と土縁



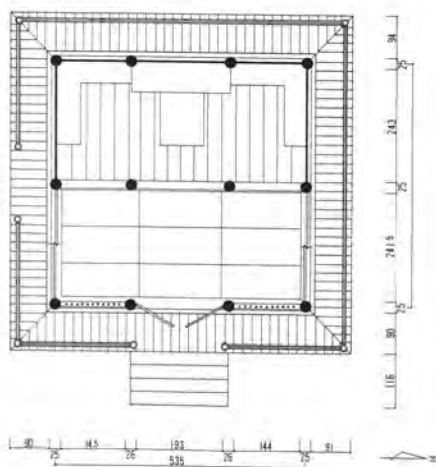
北野神社本殿外観



北野神社本殿平面図

を飾るのをはじめ降り懸魚にまで猪目懸魚を付するなど、身舎・向拝間の虹梁や木鼻などの彫刻と相俵って全般に豪華である。一方、身舎の内部は前後に仕切っていずれも拭板敷き・板打上げ天井とするなどごく簡素である。なお、現在外廻りに施されている丹塗りは後補とみられる。

若干保存している棟札のうちに、比較的大型で記載の詳しい宝暦四年(二七五四)「奉造営」のものが見え、前後の状況からこれが現存本殿の建立時のものと推定される。その後寛政十年(一七九八)と明治三十二年(一八九九)との屋根替棟札が続くが、ほかにも葺替えはあったと思われる。なお、ほかに前身建物のもとみられる棟札も数枚保存されている。



東浄寺薬師堂平面図

#### 四、東浄寺薬師堂

所在 大字川上字薄久保

建立 宝暦十年(一七六〇)以前

間口三間(五・六三メートル)、奥行二間(五・四四メートル)、宝形造り、鉄板葺き(もと茅葺き)。

町の東方谷合いを蛇行する川上川の西岸丘腹に立つ福蔵院東浄寺は、長寛二年(一一六四)初代秀榮の開山と伝えている真言宗智山派の古刹である。東に開けた丘腹の寺域は広い方ではなく、南から庫裡・本堂・薬師堂の順に東面して並立させている。北端に位置する薬師堂は、間口三間と奥行二間の変則的平面を持つ、丹塗りの遺構である。四周には擬宝珠高欄を取付けた切

記録されており、この遺構の建立はそれ以後のことに属する。おそらく一八世紀半ば頃のものであるが、大きな屋根はあるいは前身建物の名残りであろうか。

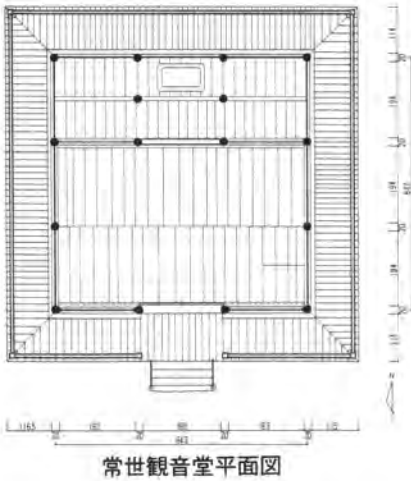
### 七、旧勤行院観音堂(常世観音堂)

所在 大字常世中野字舟木原

建立 天保九年(一八三八)

方三間(間口六・四三メートル、奥行六・四二メートル)、宝形造り、茅葺き。

町の東方を流れる川上川北部に広がる常世の田園地帯の一角に建ち、常世観音堂の通称がある仏堂である。



常世観音堂平面図

元来は現在地の西方に三〇〇メートルほど距てた田地のなかに建っていたものを、大正九年耕地整理にあたって現在地に移したと伝えている。なお、旧地に存した親寺の勤行院は、明治初年の廃寺によって消滅し、由緒書その他の記録や史料も残されていない。

堂の軸部外廻りはすべて円柱とし、正面三間のうち中央の間は格子戸の引込み、両脇の間は摺上げ板戸で開放するほかは、三方とも横板壁で閉じられる。軒は一重の疎垂木、粽付きの円柱上には台輪を回らし、隅は出組とするが中備は省略される。その一方、内陣境の中桁の両端にまで斗や木鼻を略さない入念さも併存している。

内部は前方二間通りを拭板敷き・格天井の外陣、奥一間通りは結界で距てられた竿縁天井の内陣とする。さらに内陣奥半間通りには約〇・八メートル高の祭壇を造作し、その中央にあたる来迎柱間には箱形厨子を安置して如意輪観音を祀る。外陣天井の格間には彩色画を描くのをはじめ、内陣境の欄間全体に施した陽刻など、堂内は全般に派手である。

この遺構は前述の事情により建立の記録ももたないが、天保八年(一八三七)の火

災で寺院ともども焼失し、翌九年に再建したという口伝は残っている。

なお、外陣内壁に隙間なく書かれた古い落書きにも年号の記入は見えていないが、大正九年の移築において旧材がもとの位置に使用されたことは証明されている。たぶん引家であったと察しられるが、身舎の円柱相瓦間の地覆などはその際の挿入であり、筋違はもちろんのちの補強取付け、また擬宝珠付き高欄を付した切目縁は近年の改造である。



常世観音堂正面



東浄寺薬師堂・天井

内陣には円柱の四天柱と折上げ格天井を造作し、その中央奥には享保三年（一七二八）の寄進と寺伝に記録される樺製の禅宗様須弥壇を据える。なお、内陣通り東側の二室は現在位牌室に改められているが、その前にも若干の改造を経たものである。天井は周囲一間通りを化粧屋根裏として繋ぎの太い海老虹梁を表わし、外陣は竿縁天井で中央部に折上げを設けている。なお、内外陣境に飾る獅子鼻や欄間彫刻などは豪華ではあるが、必ずしも当初の取付けとは

限らない。

この本堂の建立は、寺伝によると宝永七年（一七一〇）第八世淵竜和尚による再建と記録されるが、原形部分でみればほぼ誤まりはないと思われる。なお、本堂の東南方にあり、享和三年（一八〇三）の再建と伝えていた間口十間、奥行五間余の大きな庫裡が近年の改築で失われたのは惜しまれる。

## 六、賢瑞院山門

所在 大字川上字寺下

建立 一八世紀中頃

間口二・二七メートル、奥行二・二九

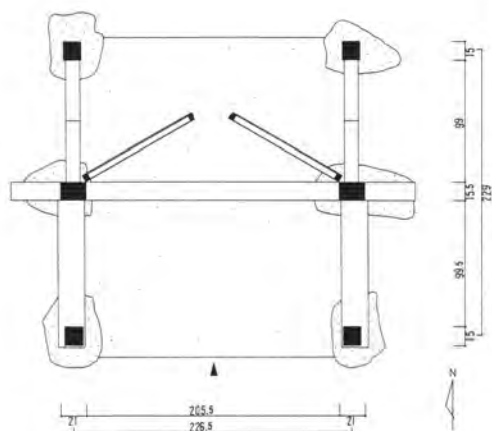
メートル、切妻造り、茅葺き、六脚門。

前出の本堂から南に約七〇メートルを距てて正面に建つ山門は、玉石基礎上に角柱建て、軒組は大斗肘木、正面及び側面の中備には厚い板幕股を配する。化粧垂木を表わした軒および妻の出はいずれも深い、袖塀の支えによつて遠見は安定感を与えている。

寺伝によれば、現存の本堂とともに宝永七年（一七一〇）建立された楼門形式の山門が、享保一八年（一七三三）倒壊したと



賢瑞院山門



賢瑞院山門平面図

後は本尊の十一面観音像とともに専らこの古宿集落が管理して今日に至ったという。したがって、由緒とうの記録は全く保存されなかったらしい。

この堂の現状の各部のうち、高欄を付さない四周の切目縁をはじめ、一重の疎垂木の軒、堂内の垂木を表わした化粧屋根裏、拭板敷きの現存の床などは明らかに後年の改造または修補である。一方、礎石および円柱をはじめとする軸組（堅板壁を除く）、平三つ斗の軒組や台輪の部分、中備の養束、



古宿観音堂天井絵

堂内の四天柱とその組物などは建立時の古式を残している。

察するに、簡素ながら禅宗様の細部をよく踏襲した仏堂の、雨漏り破損による後年の大修理にあたって、桁から上部の小屋組などを旧手法に合わせないで工事を実施したものであろう。床も既存の床の六センチメートルほど上に張り重ねられている。

外陣中央にわずかに打上げる鏡板張り天井の絵には、寛政二年（一七四二）の賛が見えるから、この天井の新旧は別としても、原形部分の建立はこれ以前であることは確かである。

## 十、薬王寺薬師堂

所在 大字台宿字大久保

建立 寛政二年（一七九〇）

方三間（間口九・三〇メートル、奥行八・五〇メートル）、宝形造り、茅葺き。

医王院米山薬王寺は、町の西方を南北に通る旧街道西側に位置して、南北朝時代頃の創立と伝える真言宗の寺院である。

薬師堂は寺域の北端に東面して建つ方三間の雄大な堂宇で、前方一間通りを吹き放って板敷きの向拝とする。

軸部は円柱であるが前通りには建具に合わせて八角柱も用いられ、正面三間を除く三方は板欠りを設けた厚い横板壁で閉じられる。二重の疎垂木の軒は、出三つ斗の軒組で支えられ、中備も同じ出組、頭貫上には台輪を回すなど、禅宗様でもやや入念な工事によっている。

堂内のうち、外陣は畳敷き（もと、拭板敷き）、内陣は拭板敷きとともに天井は設けられず、また、化粧屋根裏の形式も採らないで小屋裏を表わしている。四天柱奥の



薬王寺薬師堂外観



安楽寺山門

## 八、安楽寺山門

所在 大字塙字上町

建立 文化年間（一八一〇頃）

間口二・五メートル、奥行二・五六メートル、切妻造り、鉄板葺き（もと茅葺き）、六脚門。

旧町内の東方、上町の高台に建つ安楽寺は、天正年間の創立と伝えられている浄土宗の寺院である。

この山門はその長い参道の登り口付近に

建つものである。前後の粽付き角柱で大斗肘木を直接受け、二本の中柱で棟を支えて貫で前後を繋ぐ簡素な手法であるが、地棟中央部の上下には、板幕股と飛竜の陽彫を取付けるなど裝飾的な部分も備えている。

文化年間（一八一〇頃）、幕領であったこの地域の支配代官寺西重次郎が、家族の菩提寺（安楽寺）に対して寄進したと伝えられており、その建立年のおよそが察せられる。

現状は礎石がコンクリート製に変更されているほか、扉は見当らず、屋根は垂木から上部が改造され、また、両脇の塀（板塀）は解体されているなど、旧姿の多くが失われている。

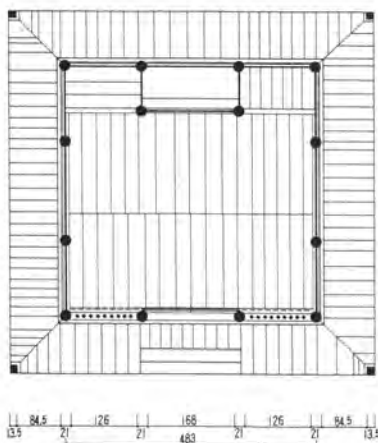
## 九、古宿観音堂

所在 大字伊香字古宿

建立 寛保二年（一七四二）以前

方三間（間口四・八三メートル、奥行四・八五メートル）、寄棟造り、鉄板葺き（もと茅葺き）。

旧街道に沿った集落である古宿西方の杉林のなかに、南面して建ち、ほぼ正方形平面をもつ仏堂である。かつて所属した寺院は明治初年の廃仏棄釈で廃寺となり、その



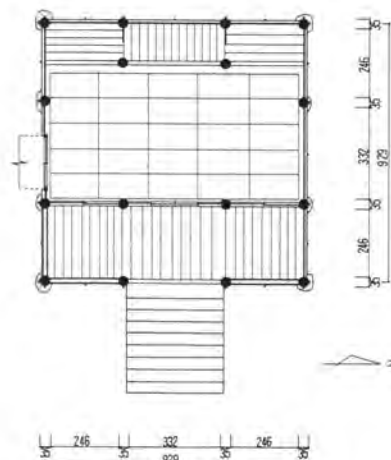
古宿観音堂平面図



古宿観音堂正面

埋藏文化財  
石造物





薬王寺薬師堂平面図

内陣通りは腰高の祭壇を造作し、来迎柱間の厨子には薬師如来を祀る。

本来この堂は、現在地の北方約一・五キロメートルの米山山上にあった米山薬師堂の御仮屋として建立されたものと伝えられている。手狭な山上と小さな堂では祭祀行事（例年四月）に不適當のため、薬師如来像をそのつどこの地に運んで祭祀を施すために建立されたという。いわば仮の祭祀堂だったもので、現存の遺構は旧領内宝坂村名主源藏の日記の記述によると寛政二年（一七九〇）の建替えと判明している。天井の造作が省略されたのも、したがって仮屋のためであつたらうし、四天柱前通りの組物の一部にも後年の造作が含まれているらしい。



薬王寺薬師堂四天柱

御仮屋として発足しながらこれほど雄大かつ入念な工事の堂宇は珍らしいが、現在はこの堂に仏像を搬入する毎年の祭祀行事は廃れ（山上の薬師堂そのものは伝わっていないというが）、それと別の像を安置する薬師堂としての独立的存在に変わっている。

### 十一、薬王寺薬師堂仏輿

所在 大字台宿字大久保

製作 江戸後期

方一間（間口真ター・〇〇メートル、奥行真ター・九〇メートル）、宝形造り、木瓦葺き、軒高一・四〇メートル、棟高一・五〇メートル。

前出の薬王寺薬師堂奥の祭壇隅に安置保存されている小型の厨子風の道具である。

井桁の土台上に建つ四隅の円柱をはじめ横板張りの壁、緩勾配の屋根瓦、一枚板の



薬王寺薬師堂仏輿

両開き扉などすべて櫨材が用いられ、軒は円柱上の丹肘木のみで垂木を省き、内側には装飾を一切付していない。

四隅の円柱側面の下端近くには、強固な鉄環がそれぞれ取付けられている（うち、二個破損紛失）のは特徴的で、両側面各二個の鉄環にそれぞれ棒を通すことにより、この道具が仏輿として使用されたことは十分に想定される。

とくにその記録や口伝は残されてはいないが、この道具を保存する薬師堂（もと、御仮屋）と米山山上の薬師堂との関係を考慮すれば、ある時期これが山上の薬師如来像を担ぎ運ぶために使用された可能性はきわめて大きい。

なお、現在は厨子代わりとして別の焼仏が収納されている。

（東北工業大学教授 草野和夫）



宇湯岐羽原谷地、通称上台といわれている。粘土層から住居跡、ピットの落込み等画然と切りこまれた遺構が出土したが、道路工事が完成間近ということで、発掘調査も行なわれず、甕・釣手土器が数個採取されただけだった。大型・ほぼ完形で出土した甕は、肩部から胴部全体に縄文が施文されており、釣手土器とともに縄文時代中期末ごろの遺跡と推測される。



羽原谷地遺跡

## 上渋井遺跡

(上渋井字市ノ沢・熊ノ平)

久慈川の東岸、羽黒山の山塊の北側谷部平坦地で、氾濫原耕地の南面に位置する。ここでは分銅形打製石斧、撥形打製石斧、磨製石斧とわずかな土器片が発見されている。打製石斧は石質もやわらかく重厚である。おそらくは土掘り用、農耕用に使われた可能性が強い。また磨製石斧は、蛇紋岩を研磨してつくられた厚い巾の蛤刃のものと、片刃の撥形のものが見られる。これらの石斧は縄文時代から弥生時代まで作られた使用されていたもので、今のところ当遺跡の時代を限定することは困難である。現在は畑になっている。

## 中根遺跡

(川上字中根)

川上川沿岸の中平地区の対岸、標高二八〇メートルのところにある。川上川の氾濫で削られた段丘上の、縄文時代後期から晩期頃の遺跡と思われる。土偶や石鏃、石斧などが出土しているが、特に土偶は、関東地方の山形土偶の影響を強く受けているようである。

## 大畑遺跡

(山形字大畑)

山あいの平坦地にある遺跡で、標高三八〇メートル、東西約一〇〇メートル、南北約五〇メートルの広さである。付近には豊富な湧水があり、生活に適していたと推測される。出土土器は底部、口縁部が主で縄文時代中期の遺跡といわれるが、偶然の出土のため遺構・遺物の色合などは明らかでない。

## 下稲沢遺跡

(台宿字下稲沢)

米山山塊と四ツ沢山塊の両突端部の間を流れる稲沢川の沿岸の段丘上にある。南東に面している。耕作中偶然の発見であり、発掘調査も行なわれていないため、遺跡の性格、遺構などの究明がされていないが、出土した土器片等から、縄文中期から後期、晩期の遺跡ではないかといわれる。また久慈川支流に面する遺跡で、石器では石錘も出土していることから、縄文後期人と漁業関連を示しており、出土品そのものより当時の生活様式を伺わせる。

# 埴町の遺跡・古墳

## 東河内遺跡

(東河内字上人蒔田)

埴町に確認された遺跡は、縄文時代中期から人々の足跡をとどめている。見晴しの良く、風当りの少く日当りの良い、そして水の豊かな、自然の動植物の確保に便利な所を選んでいる。縄文時代の人々は県内でも中期以降遺跡が大きく増加する。食糧の豊かさを示すという。すでに焼畑程度の耕作が行われたという。堅穴住居跡に住み打製石斧を使用し土を掘ることも行われたし、石錘を見ると久慈川で豊富な漁獲もさかんに行われ、石剣・独鈷石など土偶には、信仰の存在も推察することが出来る。衣類はすでに石鏃・石錐の存在も見られ鳥獣の皮利用と、アンペラ状の編物のあったことが初步的な身体を覆った生活がうかがえる。死者を葬ったと思われる。羽原谷地出土の底に穴をあけた甕があり、宗教的な行為があった。

の偏在をつくり出し身分が出来る。地方豪族となった人々の多くは、関東常陸・下野から新しい文化を持って来た人たちでもあった。四世紀ごろには日本に初めて豪族連合が畿内に発生し、支配圏を拡大して来た。関東から埴町附近に伝わるのに時間はかからなかった。日本武尊であり、味鉦高彦根命たちがそれであった。久慈川の谷間は文化の伝導路となったのである。高野・長流の官邸がおかれるまでには、賑やかな部落が八溝山系の久慈川沿いにあったであろう。伊香古墳群は六世紀ごろのものである。貴重な鉄斧の副葬も行った人もいた。朝日長者伝説は、高野郡の郡司たちの物語りでもあった。仏教も、神も人々と共にあった八溝嶺信仰、都々古和氣信仰も厚かった。

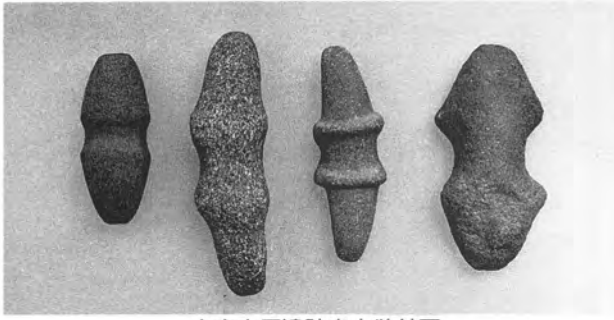
久慈川の支流渡瀬川に流入する赤坂川北岸丘陵上に位置する。標高二八〇メートル、丘陵突端部に南面する浸蝕台地上にある縄文時代の遺跡で、東西約八〇メートル、南北五〇メートル、土偶、土器、石鏃、石斧、石錘、タタキ石などを出土している。土器文様は細線の平行沈線文、網目状捺糸文、雲形文、施文の太い沈線文が見られる。また雲形文には磨消手法が見い出せるものもあって、いずれも縄文晩期土器とおもわれる。遺構の構造、層位など明らかでないが、段丘上に位置し水も近く、狩猟生活を主とした縄文人にとっては、格好の生活条件をもった所であった。発見された土偶は板状のくずれた顔面のものであり、石鏃は有茎のものが多く見い出されていた。現在は水田となっているため、散布状況は不詳。

## 羽原谷地遺跡

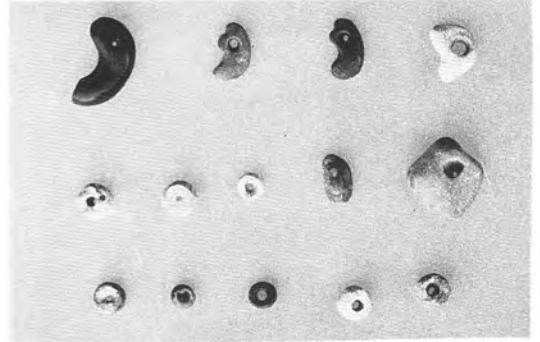
(湯岐字羽原谷地)

昭和四十八年十二月、湯岐前より南へ通じる道路の拡張工事中に発見された、阿武隈山系のおだやかな丘陵の遺跡である。大

台宿地内に弥生時代に入り、米作りが伝えられて来たのであろう。棚倉式土器も見られたことと、そのあとに入る南御山Ⅱ式の流れ、米づくりは支配者と被支配者、富



台宿南原遺跡出土独鉆石



台宿南原遺跡出土勾玉と小玉



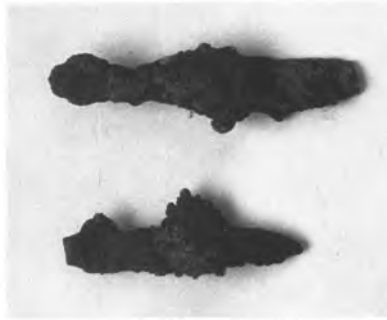
稲沢遺跡出土土器片



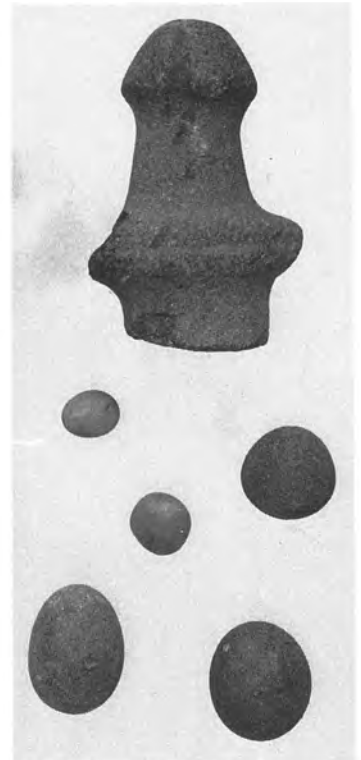
台宿南原遺跡出土小形壺



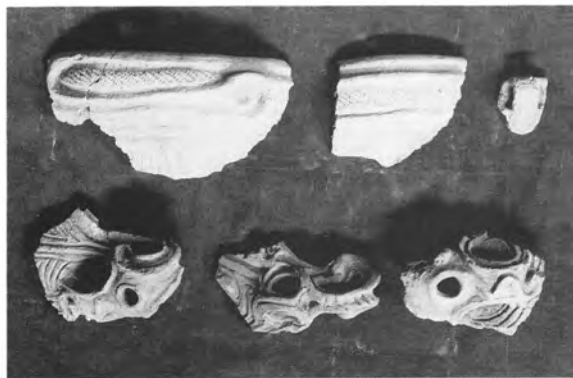
上波井遺跡出土磨製石器(上)と石棒



高野里古墳出土鉄鏃



植田遺跡出土石剣(上)と磨製石器



真名畑宮田遺跡出土土器片

町内の遺跡から  
発掘された出土品



大畑遺跡出土磨製石斧



羽原谷地遺跡出土石斧



川上中根遺跡出土土偶



川上中根遺跡出土土錘



東河内遺跡出土土偶



羽原谷地遺跡出土甕（復元）

り東北地方から北海道にかけての城に対する同意の語として使用され、一般化している。

では、実際に廃城前、すなわち戦国期・中世においても館といったのかというところではないのである。四ヶ城に関する普請の文書では、「四ヶ城之城領」とはつきりと赤館、羽黒、寺山、東館は城と佐竹氏は呼んでおり、天正六年（二五七八）と推定される「岩城常隆感状」資料九九号には「羽黒之城代越前方」とか「羽黒之城主越前方」とみえ、羽黒山は城として呼ばれており、永録十三年（二五六九）の壁（神部）氏宛の佐竹義重判物では「寺山之地在城」として寺山も城と呼んでいる。このような例は、県下においても枚挙にいとまないのであり、少なくともある時代——おそらくは近世中期以降——に本来、城と呼んでいた状況を（少なくとも関東地方に近い地方で）館という起称で統一したためであろう。城をタテとしていうのは「長福楯」にみえるごとく、楯すなわち、防壁機能という城本来の定義に見合う楯の名称から由来するとも思われる。しかし、統一的に本来、城というべきところを館といったのは、近世の地誌類である『会津風土記』や『白河古事

考』、『棚倉沿革私考』による記述に由来すると思われるのである。少なくとも塙町周辺の城址は、東北地方の城館址のうちで、最も関東的な構成をなし、その遺構からいっても佐竹氏の築城法によるものばかりである。従って、館とは、廃城後、まもなく経た時代で本来城といわれた地が館と呼ばれるようになったとみるべきであろう。本書では羽黒館という名称はふさわしくない。近世末あたりからの起称であるので、羽黒山という呼び名に従って、「羽黒山城」とあえて記載する次第である。なお、史料からの起称に従うと「羽黒城」というべきであるが、羽黒城は県下はもとより全国的に夥しい城名であるので、羽黒山城とした。

#### ○城館址の特色

塙町とその周辺の城館址の特色を、その構造、分布からいうならば、次の諸点に集約できる。

(1)山城としてのプラン（縄張と削平地・堀等の配備状況）が、階郭式といって、階段状に形成する。羽黒山城、寺山城、金井館、孤屋館等に見られる通り、並郭・連郭式の縄張が少なく、山の斜面を削平して、曲輪を階段状に中腹もしくは麓から山頂にむかつて連ね重ねて

いる。（東館は、このプランではない）  
(2)山城に空堀利用が比較的少なく、堀の形式は「堀切」といって、屋根筋を断ち切る形で、数状にわたり穿たれる山城が多い。これは、塙地区の山城立地の地勢が、痩せ屋根を利用していることに起因する。

(3)久慈川沿いの城館址が、一城で成立するのではなく、赤館、羽黒山、寺山、東館を核として、支城制がひかれ、個々の城が他城との連携の中でそれぞれ機能（防備の方向、伝達機能の役割）を有したこと。

(4)鎌倉期から室町中期にかけてと思われる館が多数存在したと思われる、多くの長者屋敷伝承があること。

(5)塙町を中心とした久慈川沿いの山城が、全国的にみてもそのほとんどが保存状況が極めてよいこと。

など以上の諸点となる。この地方の地理的な面をみれば、関東と東北の接点であり、いわゆる関東風の築城形態（丘陵上の占地など）と、東北特有の築城形態（比較的個々の曲輪面積が大きく、戦闘面より居住面を重視する）とが混じりあった状況を反映しているともいえる。

## 高野里古墳

(伊香字高ノ平)

昭和四十二年七月、山林を耕地に造成中に発見された遺跡である。八溝山地が東方に張り出した突端部にあり、北に伊香耕地、久慈川を隔てて埒町中心部に面した位置につくられていた古墳である。標高二〇八メートル。古代からの常陸道が丘陵下を南北に通じ、台宿南原・北原の遺跡を脚下に見おろし、東に接して高野神社は横穴古墳が本殿となっておるなど、歴史的景観と伝承をもっていた。

古墳は河原石積みの横穴式石室、床面は河原石の礫でタタキ締められ、巨大な奥壁は使用されていない。積石の裏ごめは黄色粘土で丁寧になされ、玄室との境には大形の石を使われていた。内部高一メートル、長八メートル、巾一メートル、L字型につくられ東側に開口部があった。

出土品は直刀二振り、まくり鍛、平棟作りが倒卵型の鍔があり、腐蝕甚だしかった。八九センチと一・〇一七メートルの長さがあった。この刀は側壁に接し直立したままに置かれていた。床面から鉄鏃・鉄斧が出土した。鉄斧は両端を折り曲げ袋部がつく

られていた。土器片二片他に遺物は見い出せなかった。調査時すでに古墳は崩壊されていたためでもあった。

## 台宿南原遺跡

(台宿字南原)

埒町中心部の久慈川をはさんで対岸の南原、北原集落の人々は、現在遺跡の上で生活をしている。久慈川沿岸の河岸段丘は、古くから肥沃の地として開発されていたのである。この遺跡は、縄文、弥生、古墳、土師、須恵器などを包含する複合遺跡である。これも正式な発掘調査は行なわれていない耕作中の出土遺跡であるが、久慈川西

岸の北原台地まで、埒町の原始、古代期の歴史を秘めた遺跡であることは間違いない。

## 植田遺跡

(植田字坂ノ下)

八溝山系を横切る中山峠山塊が久慈川のぞむ坂ノ下の集落で確認されている。性格等は明らかではない。

## 真名畑宮田遺跡

(真名畑字宮田)

八溝川と鎌田川が合流する折戸の河岸丘上にある遺跡で、縄文後期から晩期の出土品が、耕作中偶然発見された。

# 埒の城と館

埒町および東白川郡で、城と称しているものはきわめて少ない。白河小峯城・棚倉

城など近世の城を除くと、そのほとんどが館と呼ばれている。町史で個別の館址を図示しているの、それを見れば一目瞭然であるが、いずれも(平館などの例外はあるが)、立派な山城ばかりである。館は、ヤカタと違って、城とりわけ山城や平山城・丘城と

は区別されている。館は方形館址に代表されるように、平地や谷間の屋敷を中心とした農耕経営の拠点的な構えであり、生活用の城館址を一般にはいう。関東から西においては館はタテとは決して読まずヤカタであり、東北にいう館とは別個な状況を意味する。タテというのは、何もこの埒町や白河辺りの地方のみならず、福島県はもとよ



中塚館の岡館



常世中野平館



板庭銚子館



堀越金井館

### 堀越金井館

大字堀越字亀ノ江

寺山城の南北にあって実践本位の城構えで大きな曲輪はなく、守り易い小さな削平地と腰曲輪、帯曲輪を各所に配している。城は北城と南城に大別できる。北城は谷間に落ちこみ、南城は南西に突出する丘陵で北の出城的要素を持った半独立状の山城である。

### 板庭銚子館

大字板庭字大苗田

大苗田集落の南側丘陵上に位置し、東側に中塚館ノ岡館、北側には平館が存在し、羽黒山城の大手口を守備する上で、絶好の要害地にある。縄張は東南側と北西側の丘つづきを空堀と堀切りで遮断する単純なプランとなっている。東側には土塁が認められるが、かつて周囲はすべて土塁がめぐっていたと思われる、その痕跡を各所にとどめている。南より西方向にのびる空堀は外側に土塁を高く完存している。堀幅は鉄砲を意識した幅と考えられ、羽黒山城の重要性がともなう天正末年頃に築城されたと考えられる。



西河内太鼓館



米山の砦

## 米山の砦

大字宿字中稲池

米山は標高三五二メートル、町の市街地の西側にそびえる山塊で、羽黒山とともに埜町のシンボルの存在の山である。山頂には米山薬師が古くからまつられ、信仰の山ともなっている。この米山に城郭が営まれたという記録は残っていない。しかし、周囲の状況や久慈川沿岸の城砦分布から見ると米山山頂及び地続きに山城が営まれたということは十分推察できる。その根拠としては①羽黒山へ狼煙を伝達するには米山を経由しなければならぬ。②久慈川の谷間や河原床を掌握するための軍事拠点的な位置にある。③山頂部に二段階の削平地が残存し、谷を隔てて標高三〇〇メートルの所に削平状の尾根上の小曲輪があるなど、防備的な意味あいがかがえる。という三点があげられる。規模は小さかったかもしれないが、軍事的拠点となり得る十分な環境であったといえよう。

## 西河内太鼓館

大字西河内字太鼓館

本丸に相当する削平地は小さく北西寄り

に土塁の痕跡がある。この山頂より腰曲輪的な削平地が階段状に南に伸び、山頂東側は小さなテラス状曲輪が一段さがって形成し、尾根続きを切断している。北と南は絶壁で、従って南側の階段状の曲輪形成に重点が置かれている。

## 常世中野平館

大字常世中野字平館

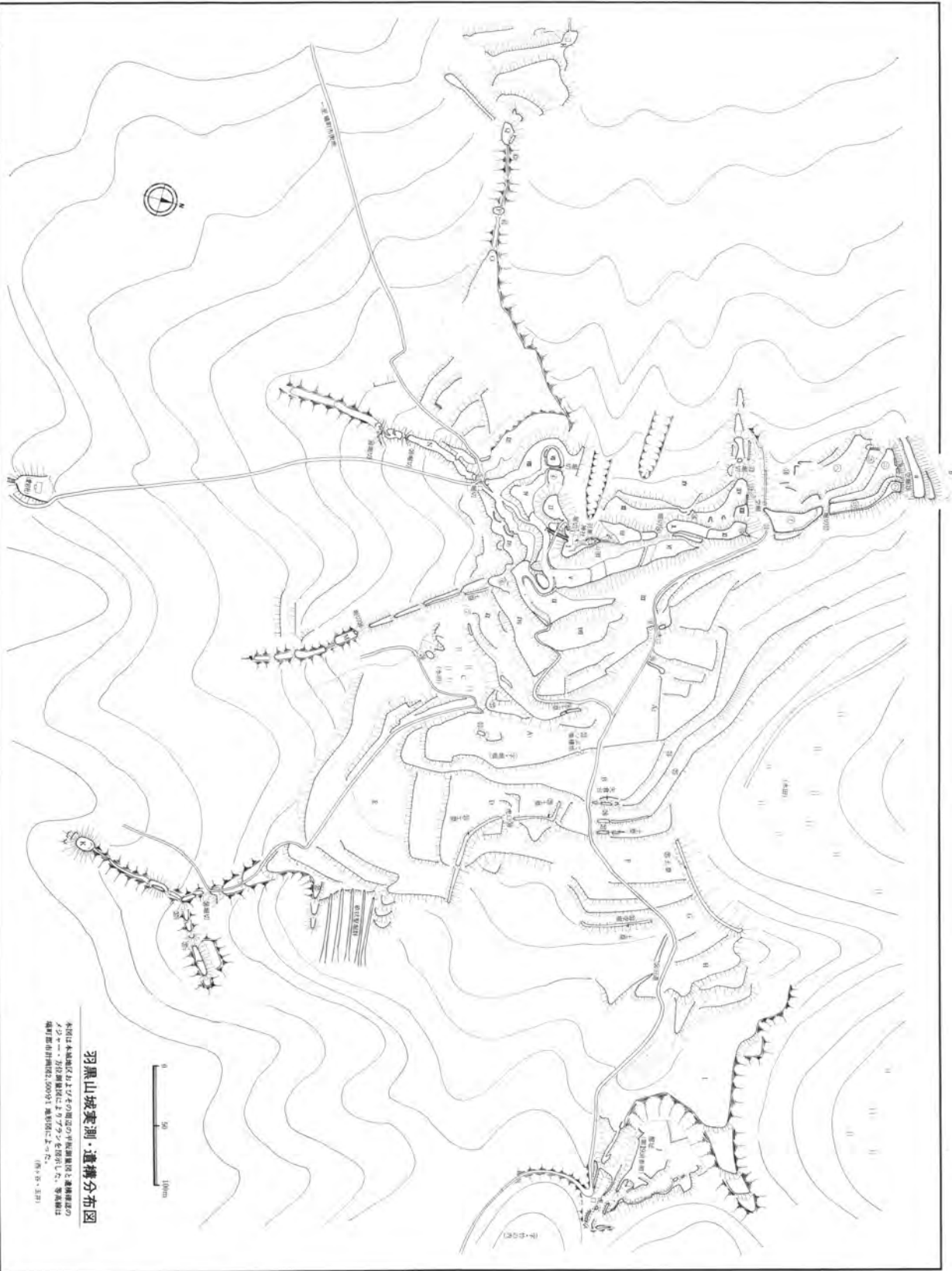
南側は川上川がせまり削られている。西側と北側には堀跡が残る。かつては周囲はくまなく土塁がめぐっていたと思われるが、西土塁はよく残存していて馬踏も認められる。この館は、関東・東北地方に一般に見られる方形館跡とみなされる。

## 中塚館の岡館

大字中塚字館の岡

丘陵の舌状台地の舌端部にあり、西方板庭の銚子館と連携して川上川沿いの平地を防備し、羽黒山城の詰城的な要素が考えられる。現状は丘陵上に民家が建ち並び、削平地もことごとく畑になっている。北側において土塁の残存が認められ、南側においては腰曲輪とみられる平地も認められるが、旧状をつかむのは非常に難しい。





羽黒山城実測遺構分布図

本図は本城地区およびその周辺の平野部調査と遺構調査の  
 ノンペーパー方位測量図に基づき作成された。測量図は  
 測量部発行図紙2,500/1 縮尺図に基づいた。  
 (1:100, 1:200)



羽黒山城

## 羽黒山城

大字塙字城山、竹之内、館山

全山に人工的削平地がほどこされ、当初西側（大字塙）が大手方面と考えられていたが、その後の調査により、大手は東側（竹之内）に開けていることがわかった。東側は土塁・堀・削平地がよく保存され、典型的な根小屋の屋敷跡を完存している。支脈の尾根は、いずれも堀切が穿かれ、屋根状は削平されてそれぞれ出城を形づくる。山頂部から北方にのびる尾根の構築法は東側と異なり、幅広い堀切と土塁・矢倉台等を機能的に配備した連郭式の縄張である。



伊香油館

## 伊香油館

大字伊香字南沢

油館は久慈川の西側でひとときわ高い山頂を中心とする山城で、古い形式の立地と縄張を有し、その展望の良さから狼煙台の機能を中心とした城砦であったと見られる。山頂の本丸に相当する曲輪を中心として北東に出城的な支峰山頂部と削平した曲輪、搦手にあたる南西には腰曲輪的な削平地が見られる。城からの展望が最も優れているのは、物見台削平地から矢祭町の東館・孤館・石館方面で、この館が東館方面の連絡経路の重要な拠点であったことがわかる。



川上孤屋館

## 川上孤屋館

大字川上字花園

館の最高部は物見矢倉台が存在したとみられる土塁をともなう。土塁は南北直線上に約六〇メートル並行して空堀が穿たれ、土塁が西側に盛られている。当城の大手口は、北側の谷間に沢に沿って付けられている道と考えられる。麓には矢倉台状の土盛りが坂道の入口にある。築城手法は比高二重土塁で曲輪構築も大規模で、佐竹氏による羽黒山城をめぐる一連の築城とみなされる。

（町教育委員会編「塙町の城館社」より）



地藏尊坐蔵 (台宿)



三番札所阿波国金泉寺



四十四番札所伊予国大宝寺  
四国霊場八十八ヵ所石仏  
(台宿)



青面金剛像碑(台宿)



髭題目の碑(台宿)



宝篋印塔(台宿)



一里塚址(台宿)



石仏群(台宿)

国道一一八号線から分かれた県道矢祭山、八槻線を、米山の山麓に沿って南へ六〇〇メートル、米山薬師の南参道入口に達する。石段の南側に安政三年(一八五六)建立の豪壮な石灯笼、天保十二年(一八四二)の聖徳太子塔、北側に造立未詳の地藏尊坐像が建っている。

山頂薬師堂への登りの参道は約一キロメートルもあり、参道沿いには四国霊場八十八ヶ所の石仏が並んでいる。大きさは五〇センチほどで、札番・国名・寺名・御詠歌を刻し、本尊仏が彫られ、その下には仏の名前が刻まれている。石段南側脇の三番札所阿波国金泉寺から始まり、参道に十五基、頂上には四十四番札所伊予国大宝寺の石仏など四基が建っている。配列はおおむね札所順になっているが、石仏が前後しているのが見られるのは転落の際等に並び換えられたものであろう。

山頂から棚倉町八槻の米山下へ下る北参道には十八基確認できる。米山下の集落のうしろにある墓地に八十八番札所の石仏があることから、参拝の順路は南参道から頂上薬師堂を参拝し、北参道へ下るものと考えられる。石仏は石質・彫り・型など異なるものが見受けられ、特に北参道では札番

と本尊名だけを刻した簡略化された角型のも見られ、同時に建てられたものではないと考えられる。全部の石仏が見られないのは、参道から転落したり、破損したり、或いははじめから建てられなかったのかは判然としない。

西麓中稲沢の北野神社境内には約三年の歳月をかけて明治二十一年に完成した中稲沢から棚倉町に通じる隧道の完成記念碑が建っている。そこから二〇〇メートルほど米山の山中に明和九年(一七七二)の青面金剛像碑、文政二年(一八一九)の湯殿山碑、文政五年(一八三二)の如意輪観音像碑がある。

南参道石段からおよそ五〇〇メートルで台宿の集落に入るが、途中稲沢に入る丁字路に慶応二年(一八六六)の髭題目の碑と明治二十五年(一八九二)の二十三夜塔碑を見ることが出来る。台宿には真言宗智山派薬王寺があり、境内薬師堂は町指定の文化財である。薬師堂北面には安永五年(一七七六)の宝篋印塔、貞享二年(一六八五)に米山で入定した金剛院有善上人の寛政四年(一七九二)建立の六三四字からなる追慕の碑と、文化五年(一八〇八)の二十三夜塔、嘉永四年(一八五二)の馬頭観世音碑、

## 埋蔵天然文化財



久保田層産の主な貝化石  
(約1000万年前のもの)



久保田層の貝類化石群集の産状  
(西河内窪田南東貝化石採取場)

### 埧の貝化石

埧町の貝化石層は、学術的にはなかなか貴重な存在で、地質古生物の上でさまざまな問題が提供され、生物進化の過程が一層鮮明になるだろうといわれている。アイソトープの半減期から調べると、約二千万年から二千五百万年以前のもと言われている。埧町西河内窪田地内の作業現場では、採掘のため表土は取り除かれ、高さ5mの垂直な露頭には大小の貝化石がびっしりと乱雑に入っている。

貝化石は久保田層の下部にあり、層状をなして堆積しており、保存状態も比較的良好で、暖かい海水にすんでいた貝の化石が多く産出している。

産出する化石を一個ずつ取り出してみると、二枚貝では一つずつばらばらになっている方が多いのに気づくが、中には二枚しっかりしているものもあるので、運ばれたとしてもそんなに遠くから運ばれた物ではないことは確かである。

また、西河内の含貝化石層は採掘のために坑道が縦横に掘られているので、坑内に入ると保存のよい貝化石が坑道の両側に現れている。

### カナツボ石

常豊地区の一部で産出する。

外部は、砂鉄または鉄鉱石のようなものでできており、中に砂がつまっている。穴をあけ中の砂をとると、壺になる。

形は様々であるが、主に球形、たまご形、ひょうたん形で、大きさは小さなもので五ミリ、大きなもので三八五ミリのものが見つかっている。最も多いものは二〇―三〇ミリのものである。

成因は、カコウ岩のまわりに鉄が付着し、風化してできたと推論されているが、明らかでない。



常世北野産出金壺石

# その他の石造物



道標 (常世中野)



片貝小門前碑石 (片貝)



己待供養塔 (東河内)



六面地藏尊碑 (植田)



十三夜塔 (川上)



道祖神 (湯岐)



供養塔 (上波井)



不動院供養塔 (竹之内)



庚申塔 (田野作)



中里供養塔 (田代)



供養塔 (西河内)



線描石造物 (真名畑)

る。  
 坂ノ下の熊野神社の西方で、県道石井・大子線と旧真名畑道との分岐点に、弘化三年(一八四六)の二十三夜塔碑のほか、石塔十基ほどが横たわっている。真言宗照明

院の跡という。  
 植田蔵ノ作の真言宗歎喜院の廃寺跡には、元禄十二年(一六九九)の六面地藏尊碑一基と二十四基ほどの石碑がまとまってある。



如意輪観音二基 (植田)



中沢一里塚 (植田)



三界萬豊碑 (伊香)



南無金光明最勝王經の碑 (伊香)



道標 (埴)



豊符神の碑 (台宿)



馬力神碑 (伊香)



自然石の手水盥 (伊香)

廃寺常泉院から移されたといわれる寛政五年（一七九三）の地藏尊がある。

台宿の南端、県道の西に浄土宗禅林寺の廃寺跡がある。元禄二年（二六八九）の六字名号供養碑と寛政元年（二七八九）の念仏供養碑のほか、廃仏毀釈の際に顔面を破損したといわれる石仏十二体がある。また東側には一里塚があり、ここから久慈川沿いの沃野と伊香宿・東館の宿を遠くに望むことができる。以前には街道をはさんで東西に榎の木が立っていたといわれるが、今は県道東側の古木と、昭和十三年建立の馬頭観世音碑、一里塚址と刻した石碑一基を残している。西側すぐ脇の熊野神社境内に建つ文政四年（一八二二）の豊符神の石碑も、かつてはここにあったといわれる常泉院にあったものである。

台宿の東方にそびえる標高三六四メートルの羽黒山頂には出羽神社が鎮座する。西参道鳥居下には大正五年（一九一六）建立の馬力神碑がある。

享保十四年（一七二九）からの陸奥代官塙陣屋跡には、享和元年（二八〇二）の十夜念仏供養塔、ほかに甲子塔などがある。陣屋跡から南へ二〇〇メートルの所に、寛政五年（一七九三）塙代官寺西重次郎が

造ったと伝えられる向ヶ岡公園がある。公園内には寺西代官の子息寺西隆三郎が、父の仁政を記して文政二年（二八一九）四月に建立した高さ二メートル余の和文の誕生塚碑、文政十二年（二八二九）の粟島大明神碑、明治十八年に造られた道標、昭和九年の水郡鉄道完成記念碑などがある。

この公園から南へ一〇〇メートル、国道一一八号線の西方道路下に、水戸天狗党の田中愿藏刑場跡碑と慶応元年（二八六五）の供養碑が建っている。

高野里集落西の真言宗天照寺廃寺跡の境内には、明和六年（一七六九）の南無金光明最勝王経の碑と年未詳の庚申供養碑と六字名号碑が建っている。

古宿集落の西にそびえる標高三五〇メートルの山頂を中心とする油館の山麓の観音堂の境内には、安永四年（二七七五）の自然石の手水盥、寛政十年（二七九八）の三界萬豊碑、元治元年（二八六四）の如意輪観音碑、明治・大正期の馬力神碑四基と、年未詳の山神碑がある。

植田中沢にある一里塚の碑は、昭和四十三年に明治百年を記念して建てられたものである。高城小学校西方の真言宗観音寺の境内には、年紀未詳の如意輪観音二基があ

民家  
古文書



## 塙町ゆかりの人々 (その二)

## ● 寺西重次郎封元

田沼時代の後を受け、引締め寛政の治へ協力し、この塙の陣屋へ在住のまま、長期間(寛政四年一七九二―文政十年一八二七)、この地方の行政に当り、民力向上へ尽した寺西代官は、江戸時代珍らしい代官の一人であろう。

その業績は、農村人口の増加・荒地の防止回復生産向上とした当時の緊急施策であり、人心引締めによる社会風潮の刷新であり、時勢に反した容易ならざる行政であった。これは保守的改革であるが禁止と節約が強制され、住民の意に反したものであった。その推進に当る属僚は、少数且つ旧例になじむ俗吏であり、寺西行政の批判を買う悪徳下僚も出たことや又一面には、当時までの代官は、数年交替の腰掛行政で陣屋に在住することも稀で江戸詰めが主のために長期推進の行政は行われ難く、住民も、それに慣らされての対応ではなかったか。且つ寺西の施策は、ただ自領内のこととせず周辺十一藩の領主と協議し、広域一体とした革新を目ざしたことは、一歩進んだ行政である。しかしこれらのことは、桑折領内へ赴任に際し、就任拒否の理由とされた程であるが、後に了解され死去するまで通算三十有五年間の勤務であった。その治績詳論に甲乙あるも、その没後、相馬を旅行した水戸学者の小宮山楓軒は、その治績としたものを確かめ、賞讃しているし、又当時の八槻別当の八槻孝良が、随筆集にその布令の実際を表裏あり、実行されない数々の事例をあげられ、又、下僚の収賄事実

等を書かれ、公金の取扱いに、公正を欠いた事情を書き残されているが、これは、当時の社会実情の表裏を突いた記録である。

明治の「沿革私考」の著者石井可汲は、「誕育家」の碑文について、その成績は思いの外ではとし、売名の疑もあり、その善政としたものに表裏があり、実施の手段にも誤があつたとし乍らも、治績としたことも事実であり、責めるには悔が残る、と書かれてある。

そのことの一つに、桑折への離任に際して、塙住民から、功績を称え、留任の願書が出されており、支配地内には、生祠とし祭神ともされた程である。

## ● 交通運輸業に当たった人々

近世の交通運輸としては、正規の宿駅制度の敷かれた旧水戸街道筋はともかく、そのほかには常北の平潟港より阿武隈山地を越え、ここ塙・棚倉への交通運輸の道があり、その沿道筋の人達により輸送事業が行われたことである。その問屋に当たる差配をされた方々もあつたればこそ、と思われる。

その道筋の常世中野の荒川家には、その業に当たられた方があり、天保の頃の荒川彦惣なる人も、その一人であり、天保八年、その地の観音堂(現常世観音堂の前身)焼失後に、その再建事業を果たされ、貴重な古仏の本尊仏、如意輪観音を今日へ伝え残されている。





永野信也氏宅



金沢利治氏宅

いるので、それ以前の建築であろうと推測される。

軒は「サガイ」ツバメガエシで、栗材のちよくなけずりは風雨にさらされている。街道に面して四ッ脚門があつたという。

### 永野信也氏宅

東河内字炭釜

当主や周囲の話をまとめると、約二百年前に建てられたものと推定される。

合掌屋根下の中央三間は、奥行三間の上を両側へ増築したセガイ等が土間の上に見られる。



吉成正大氏宅

### 吉成正大氏宅

植田字前ノ内

金沢氏宅と交替で名主をつとめたという上層の住居。

享保二年（一七一七）改築と印された普請帳（県史所載）が保存されている遺構であつて、地域民家の比較上は便利である。

敷地は約九〇〇坪を有し、中規模な主屋の北側には天保八年（一八三七）建設の離座敷がつづき、その他、門や倉とも配置されている。

現状では背面の改造が目立つだけで、間仕切とうは比較的良好の姿を残していると推定される。やはり原形でも室列は四室列で「なかま」前面に間口一・五間の式台が設置され、このなかま列を境に、接客空間であるざしき部と「かつて」前面のそれぞれの開口形式にはかなりの相違があらわれるのもこの時期の上層住居の特徴であろう。

土間内にはうまやの形跡がみあたらず、当初は「だいどころ」側面にうまやを併置していたとみられる。

# 埜町の民家

## 金沢安正氏宅

植田字坂ノ下

八溝山の麓、久慈川沿いに残る庄屋をつとめた住居である。

軒を高く改造するとき、小屋組も和小屋にしたらしく、軒は化粧たる木、屋根は入母屋の瓦葺になっている。しかも「なかま」前面のえんに「げんかん」を付加するなど外観は相当に様相を変えている。

内部にも改造はおよんでいるが、ざしき部分は比較的よく原形の姿をとどめているのははじめ、他の間仕切とうもほぼ推定でき、当時の上層住居の形態をある程度うかがうことができる遺構である。

主屋規模は約六七坪と普通であるのに対して、土間面積が少ないのはこの地方共通の外うまや形式をとっていたためと、他の作業施設を別棟に配置していたためのように判定される。

ざしき列となかま列の間に前室および通路の役割を果す「とおりま」が設置されており、室列が五列となるのも特徴であろう。また「うわいりり」おくの「りょうりべや」と呼称される室はどのような目的に使用されたか興味もたれる。

えんにも欄間を設けたり、障子戸の結線も珍しいなど、意匠的に凝ったところが多い。なかでもとくに「しよいん」や「じょうだん」と「しもざしき」の間の欄間は見事な透かし彫りで、上層家屋を象徴的に示している。

建築関係資料はまったく不明であるが、新しい要素が著しく加わっているため幕末に位置するものであろう。

## 福原京子氏宅

台宿字台宿

曾祖父（安政三年没）が火災に遭い、従前通りに再建したという。常陸太田街道沿いで昔は旅人宿「扇屋」を営んでいた。

広かった土間は改造されているが、一部中二階を持つ構造はそのまま残されている。外部の建具は、道路に面した側のみ取り替えた。

## 金沢利治氏宅

台宿字台宿

台宿村の名主の家で、中間玄関のケタの上に元治元年の制札が針で打ちつけられて



福原京子氏宅



金沢安正氏宅



「寛延三年奥州白川郡村々強訴百姓御仕置申渡書」(鈴木正家)

## 鈴木正家文書

この文書は、東白川郡塙町大字伊香字古宿一六三の鈴木正家に伝存した文書六二二点(近世文書六一七点、明治文書五点)である。棚倉藩および幕領塙代官所の支配下におかれた伊香村名主文書の一部および塙年番会所に出仕した関係で、同年番会所が取り扱った塙代官所の年間業務内容を年中行事としてまとめた「嘉永三年雜當用控記」は、江戸幕府代官制度の研究に貴重な史料であるとして『江戸幕府郡代代官史料集』(村上直校訂・近藤出版社)に収録された。

幕政では年番会所が取り扱った赤子養育、貯穀、夫食代拝借・拝借金、返納金取立に関する文書、年貢・諸負担に関する訴願、村と町では、奉公人が盗難などの事件、災害に関する文書がかなりまとまっている。産業とくに農業用水・堰・山論関係では、伊香村だけでなく塙年番会所でも取り扱ったものもふくまれている。このほか酒造、鋳物・野鍛冶業関係文書、あるいは交通関係では、伊香村問屋、助郷、廻米に関する文書八六点がふくまれる。一揆・訴願では、寛延二年の戸塚騒動の農民にたいする「寛延三年奥州白川郡村々強訴百姓御仕置申渡

書」などが収録されている。

戸塚騒動は、寛延二年九月塙代官寛伝五郎の支配地で戸塚村など一カ村が中心となつて発生した一揆で、寛延元年・二年にわたつて奥羽地方は凶作に見舞われ、申し合せたように桑折代官神山三郎左衛門の支配地、三春藩・守山藩・二本松藩・会津藩においても一揆が発生した。塙領の農民は、年貢上納の延期、種粃の貸し下げ、救済金の交付などを要求して訴えた。江戸にあつた寛代官は、塙からの知らせで塙に向いが、農民らが竹槍・斧・鎌などを持って、代官所を囲み、身の危険を感じた代官は、ひそかに近くの安楽寺に逃げた。一揆の農民は激怒し、寺を囲み代官が出なければ寺ごと焼き払うと詰寄つたので、代官はもはやこれまでと寺の押入れで自刃したと伝えられる。一揆は棚倉藩の応援で鎮圧され、主謀者とみられた戸塚村長百姓善兵衛、幸助、七三郎などの磔刑・死刑をはじめ農民五五九人が刑をうけたといわれる。

このように鈴木家文書は、塙年番会所関係文書が多数ふくまれ、塙代官領の研究には欠かせない貴重な文書である。

# 塙町の古文書

## 常世中野区有文書

この文書は、現在東白川郡塙町大字常世中野にあって、常世中野区長によって引き継がれている。もとは常世中野村名主文書・常世中野戸長役場文書として引き継がれていたものである。総点数四七七点（近世三九六点、明治期八一点）からなっている。

常世中野村は、元禄郷帳や天保郷帳では常世中村ともいわれた。はじめ常陸佐竹領、慶長七年幕領（彦坂小刑部）元和八年棚倉藩領、享保十四年幕領（竹貴代官所・塙代官所）天明四年棚倉藩の支配下におかれた。「正保五年三月村内御改二付書上帳」（『塙町史』<sup>2</sup>）によれば、村高五四五石一斗三升二合余、人数一三〇人、家数二九軒、馬数一七疋と記されている。

この区有文書は、土地関係では「正保四年八月奥州棚倉領白川郡常世中ノ村田畑水帳」をはじめ「慶応元年九月常世水損地小前書上帳」など三三三点、年貢関係では「寛文十二年十月子之歳常世中ノ村土免状之事」など年貢割付状は「慶応三年十一月卯

御年貢免状之事」まで一六五通、年貢皆済目録五四通、御年貢親金勘定目録三二二通、浮役銭之事三一通、御年貢御用捨引四八通などよくまとまっている。

村方庄屋役引渡帳面目録（八通）、村絵図、村差出帳は、常世中野村庄屋を代々つとめた荒川家に残るものと、区有文書にある天保七年三月、慶応元年、慶応三年九月、慶応四年八月の村差出帳とがある。これによって常世中野村の概況、村民生活の実態を知ることができる。また村方出入、借用証文、質地証文などもふくまれるが、この常世中野区有文書の中心は、土地・年貢関係といえよう。

## 松本喜輝家文書

この文書は、現在東白川郡塙町大字中塚、松本喜輝家に伝存する中塚村名主文書の一部である。総点数は三八〇点、うち近世文書二八七点、近代文書九三点である。

中塚村は、慶長七年幕領（彦坂小刑部）享保十四年幕領（竹貴代官所・塙代官所）の支配下におかれた。

村高は二五二石二斗五升三合で「天保郷帳」では二五五石余、また寛延二年・寛延三年の年貢割付状では、中塚村上組（高七九石七斗七升八合五勺）中塚村下組（高二七五石三斗九升四合五勺）とある。下つて明治元年、「旧高旧領取調帳」によれば、上中塚村（高二四石六斗七升六合六勺五才）、下中塚村（高四〇石四斗九升六合三勺五才）とあって、上中塚村は棚倉藩領分で、下中塚村は幕領塙代官所の支配下にあった。

中塚村二五五石余が村分けされるのは、棚倉藩主小笠原堯の天明四年十一月塙代官領のうち一七カ村五八〇〇石余が領地引替となった。

このときの一七カ村は、瀬ヶ野村、小爪村、強梨村、戸中村、漆草村、大梅村、福岡村、上手沢村、下手沢村、北山本村、中山本村、下山本村、上洪井村、中野村、川上村、川下村、それに中塚村のうち二一四石六斗七升余が、塙代官野村権九郎から引渡をうけた。このとき中塚村の枝郷館岡村分四〇石四斗九升余が、幕領中塚村として残り、一村一人百姓で、松本家の先祖である名主喜兵衛（喜平）が中塚村（下中塚村）を支配した。

主として中塚村の年貢関係文書である。

民工

俗芸



## 埴町ゆかりの人々 (その三)

### ● 特殊産業に携わった人々

町内の上石井には、早くより石川三家・後二家（累代文左工門・忠兵衛を名乗る）協力して梵鐘の鋳物業を開拓し、

この地方の社寺へ、大小の梵鐘を奉納してきた文献がある。その祖と思われることに、石川静阿弥なる方は、天文七年（一五三八）十月、八溝山下の一坊に、梵鐘を納めたとする史料がある。（白河古事考）

近世に入つては、各技術保持者の統制が敷かれ、允許状が発行されたが、石川家では累代京都の允許元の免状を得て、その業を受けつぎ、その製造に当たっている。

近代へ入つては、大正六年米山梵鐘の改鑄を行っている。又同書（白河古事考）によれば、如何なる条件に依つたことか、中世末、近藤治部大輔なる者、武士をやめ、台宿阿伽沢（伊香に赤沢あるも台宿境の関沢の誤りとされる）にて、鍛冶業を創始したとある。このことあつてか、近世には町内の赤坂・川上・前田等に鍛造の特殊産業が受けつがれ、農具製造が盛んに行われている。

その素材としたものは、平潟港より運ばれ、それを鍛造して農具・特に鋤類の製造で名を挙げ、その筋の専売許可を得て近県へ搬出名声を得て、富裕者となった。又、社会事業や社寺への奉獻も行われた。今に残るものに前田の鈴木家からは、その檀那寺の賢瑞院へ今日見る豪壮な須弥壇が寄進されてある。

### ● 医術・美術に活動した人々

#### 一、医師緑川利實

幕末近い寛政の頃の人で、常世中野に住み、「医は仁術」の文字通り医療に尽くし、患者に貧困なる者あれば、無料にて治療に当り、住民より大いなる尊敬を受けていたが、向学心に燃え、京へ上り名医について修業中、病死してしまつた。その徳たる水戸学の学者であり、能筆家であつた立原翠軒をして弔文の筆を取らしめその弔魂碑は今常世観音堂の境内へ残されている。

その妻は、常陸赤浜の長久保赤水―地誌学者として、著名な方の娘であつたことから、この地へも来訪されたことが、川上の廃寺真福寺の梵鐘銘に書かれている。

#### 二、画家荒川九洲と関口松宇

荒川九洲は秋田に生れ、幕末この地へ移り来て住み、初め八槻家へ寄寓したが、後常世中野へ移り、荒川家へ入籍して、日本画を良くし、業とし、明治十年代まで活躍している。当地には、数少ない作家として、多くの作品を残された。

関口松宇は、棚倉藩士であつたが、明治維新後上石井上ノ原へ帰農している。画を能くし、作品を残されたが、湯舟観音堂の天井絵は、その手になる作品である。

# 塙町の絵馬

『楠公父子の別れ』（子育地藏堂内）

大字塙字本町四五の二

本堂は昭和五年に新築されたもので、本尊は廃寺・地藏院より移され、この奉額も地藏院より移されたものであろう。

材質は杉材で、色彩が施してある。

銘文は以下の通り。

「奉獻

大平右源太宗直

文久二壬戌七月良辰」



『御詠歌』（薬王寺薬師堂）

大字台宿字大久保五三

本堂入口の上に掲げてある。奥の院があった米山参道には四国八十八ヶ所を祀った石仏があり、本額もその信仰より掲げられたものである。材質は杉板材で刻文は白塗してある。銘文は以下の通り。

「五十五番 伊豫國三島宮

このところ

みしまにゆめも

さめければ

へつくうとでも

おなし

すいじゃく

敬白

文政十一歳子三月」



御詠歌（薬王寺）

『湯舟観音堂の絵馬』（湯舟観音堂）

大字山形字桜下一三四

湯舟観音は馬の守護仏として広く茨城県内からも参詣があった。特に小絵馬が多い点では県南随一であろう。最古のものと思われるものは「文政二庚寅星初春」の銘があるものだが、屋外にあるので風雨蝕が甚だしい。

『武者絵』（東浄寺薬師堂）

大字川上字薄久保三三

横長の家形絵馬で、板のつなぎ目の部分が剥落して絵は明瞭でない。款記は上部と左に

「奉納御宝前

宝曆十庚辰九月吉祥日

願主 鈴木小治良

藤田平作」

と見える。

また、堂内に天明八年二月にここで開かれた句会の奉額があるが、材料は腐朽して読み難く、わずかに十六人の俳名が読みとれる。



武者絵（東浄寺薬師堂）

# 埜町にある美術工芸品



涅槃図 (海蔵寺)



古鏡 (龍沢寺) 銅製古鏡 (安楽寺)



扁額 (常世観音堂)



寺西封元像掛幅画 (秦まつよ氏蔵)



常世観音堂天井の花鳥図



螺鈿の手箱 (青砥久信氏蔵)



欄間の透かし彫 (青砥康友氏蔵)



甲冑 (青砥康友氏蔵)



まんじゅう笠 (近藤良平氏蔵)



(安部寛氏蔵) 印籠 (個人蔵)



鍔釦 (安楽寺)



でんぶ台 (安部寛氏蔵)



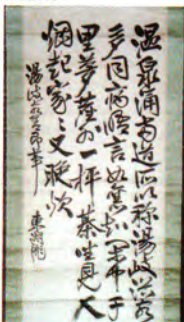
観音収蔵用厨子 (常世観音堂)



磬子 (龍沢寺)



殿鐘 (徳林寺)



湯岐客舎即事詩幅 (大森弘一氏蔵)



鰐口 (東浄寺)



須弥壇 (覧瑞院)



# 埴町の祭

埴の愛宕神社祭礼



埴上町に鎮座する愛宕神社は、江戸時代の初期承応二年（一六五三）八月、埴の旧家秦家の取計らいにより、京都の北西愛宕山にある。古社の御分霊を受け、建立したとの文献がある。明治の廃仏棄釈までは、その下にあった真成院正福寺が管掌し、社寺共に、境内七反五畝と、氏子により維持されていた。明治以降、境内の社木等の売却等により、維持されたことである。

本社の京都愛宕神社が奈良時代大宝年間に祀られ、祭神が防火の神であったことから、崇敬と保護とが重ねられ、そのため埴でも火災の少ない所とされてきたが、戦後、重ねて大火災があり、これは年毎の祭典をおろそかにした為として、昭和二十七年七月二十四日には、祭典復興の大祭礼が行われた。以後年毎に、又三年毎の大祭典には、種々の催しを加え消防団も参加し、五彩の放水をするなど、又、神輿の渡御には、古式の行列をもって、賑やかに行われ、防火予防行事と重ねて、町民からも迎えられている。

# 埴町の祭

埴の灯籠流し



民俗行事とし、早くから旧盆の終る七月十六日には、各戸毎に先祖の精霊を送り出す諸行事を行ったが、その一つに、海岸や、川辺の家では、板や紙等をもって、小さな灯籠を作り、火をともして水上へ浮かべ送り出す、いわゆる灯籠流しが行われた。県

内にも、地域行事として行われ、県都福島では、阿武隈川での行事は早くより行われている。

ここ埴の灯籠流しは、故金沢春友さんの書かれたものに依ると、昭和五年七月末(当時常豊村長)時の行事であった。在郷軍人



の点呼があり、執行官がここ埴の桜木橋を渡られた折、川の流れが緩やかであり、灯籠流しには、好適な所との話があり、時の常豊小学校長深沢定先生と共に実行にかかり、同校職員であった鈴木泰芳氏に尽力を依頼、埴の青年会を動かし始められた行事とされている。

その後年々受けつがれ、精霊供養はもとより、花火打上げ、盆踊り大会等併せ行われてきたが、新暦の生活となつては、八月十六日に行われ、更に他町村との行事のかわりから十五日の行事となり、又灯籠も従来のものへ加えるに創意工夫が見られる。大型となり、賑やかに当地方の年中行事の一つとなっている。

## 台宿の米山薬師祭典

旧暦七月晦日の夜より八日朔日の朝にかけての祭礼行事、晦日には、午後より米山登拝が始まるが、往時はその列「螻蟻の列の如し」とあったように、引きも切らず、

参道に列をなし、山頂へ連なると、いい伝えられている。その参拝者は、南は遠く馬頭以西からも徒歩で参加する程であり、夜を待つて盆踊りへ参加した。夜の盆踊は、宿内に設けられた櫓を囲んで、夜明まで踊り明かされたとのことである。



民家でも、今日とは違い廊下、家内まで解放して休憩所に当てたこと故、踊っては休み、休んでは踊りの列へ入る、としたことで短夜を終夜踊り、夜明けを待つて解散したという。

今日では、全く考えられない供養盆踊りの大祭であった。最近では、薬王寺境内に、時間をきつての盆踊り行事となり、伝統を継ぎ守る祭礼行事となっている。

### 四月祭（春祭り）

往時の四月祭りは、旧暦四月七日の宵祭から、十八日の本尊帰山まで、長期にわたる祭礼である。

その間、縁日と呼ばれる日には、特に参詣者が多かった。七日の宵祭は、午後より夜にかけて、米山々頂より、本尊薬師を台宿の薬師堂へ遷す行事があり、それに伴う梵鐘を担ぎ運ぶ行事があり、「鐘揉祭」と呼ばれたことである。

先ず薬師本尊は古い御輿により、信徒の年輩者十六人に担がれ、多くの提灯に導かれながら行列をつくり、その後へ続く、梵鐘は、丸太二本に結んで、多くの若者たちに担がれ、道中を揉み合い、鐘を打ち鳴らしながら薬師堂へと運ばれる。

# 埴町の祭

伊香の「おすわ(諏訪)さまの祭り」



期日 夏の土用丑の日の前夜より、当日の夜半まで

行事 前夜祭、氏子の當屋(當前とも)宅

にて(現公民館)若者が参集し、神殿より御神体をお仮屋へ移し、お籠り行事があり、夜半還御の前夜祭が行われる。

当日の未明、お籠り明けに街路の流れに、潔斉行事があり、献饌のための餅搗きが行われる。

それには、保管されていた豎杵、棒状の千本杵といわれるものをもって巨大な鏡餅をつき、奉献する。

外にこの杵数本に餅をからませ、高くかかげて部落内を通りねり歩き乍ら、住民へちぎり取らせる。病難除けの縁起行事がある。(町内田代にも行われた)

中には、往時、山車(用材は今日残され保管中)、屋台等の神幸行事があったとのこと。

夕刻になり、神燈を点して、お仮屋前の神事があり、先達・御祓・御神鏡・雌雄の獅子頭の順に、若者が奉持して各戸を巡り歩くのであるが、各家へは、土足のまま駆け抜ける奇祭となっており、各戸でもそのことを祭礼事として受け入れ、夜半に終了する。

## 田代中里の北野神社祭礼

期日 夏の土用丑の日

行事 通例の神事と、特殊行事の共同餅つき、その餅の部落内持ち廻りが行われた。

内容 祭礼として、先ず献饌用の餅搗きがあり、更に信徒氏子のため餅搗きが行われる。

それには、古くから境内の一角に設けられた所のかまどで、もち米が炊かれ、餅搗きとなるが、その杵は、生木

を切って作った棒状のままの千本杵といわれる杵で、「ヨイサ」「ホイサ」の掛け声に合わせて搗かれ、特に「こねどり」には、空白が用意されて、それを杵でたたき、音をたて、調子をとり、合わせ乍らの興を添えることが行われる。

戦前には、この搗かれた餅を、千本杵の何本かにまきつけて、部落内を持ち廻り、それをちぎって食べることにより、無病息災とする。伊香の「おすわさままつり」同様の行事があった。

昨今では、境内で葛の葉などに各自が受け、直会としている。

参考 伝承によれば、天明の凶作の折、祈願行事として始められとされ、又「土用餅は血肉となる」との伝承にあやかる行事とされてある。

先きの大戦中から食糧事情により、中止されていたが、昭和五十一年より糯米四〇キロを用意復活された。田代という開発地名は高冷地のこととして幾度かの凶作に北野社を祀り祈願行事とされたことだろう。



# 塙町の祭



この間、仏輿は、この鐘揉の進行を待つ間、時に息杖をつき、留まるがその折、信徒の人々は御賽銭をあげ、その輿の下をくぐるが行われた。それにより、疫病を除けるとされた。

このような行列は、数時間かかって薬師堂へ移され、その後十日間、縁日毎の賑わいがあった。

その縁日とは、先ず始めの八日は一つに米山開山の日とされ、又各寺では、灌仏会

の日でもあるが、ここでは、薬師堂への初の願掛けの日として、病難除けの祈願に、お餅などをお供えの参拝が行われる。

次の縁日といわれる日は、十二日、十二手観音の日とし賑わい、次の十五日は、結縁の日として、初日の願かけをあらためて、餅などの供物をする。これらの供物の餅は、十八日の薬師帰山後、割られて各参拝者へ配られた。

又前日の十七日は、八溝嶺神社の祭典日であり、その登拝者である、この地方の人達は、峯伝えの山道をここ薬師堂へ下り、参拝し帰宅することで、賑わいがあった。

又始めの日の七日の午後、山頂に奉置されてある「おびんする様」の仏像を放課後の小学生達が棒に逆さまに吊して部落内をかつき廻る行事があり、各家では、いくらかのお賽銭を上げる慣わしがあった。この仏像は、子供へ知恵を授ける御仏として行われたことである。

以上四月祭典であるが、それが何時の頃から行われたかは、資料はない。又昭和三十九年五月の頂上仏堂の焼失後、しばらく、この祭典行事は中止されていたが、近年再興、旧例の如くではないが、新曆をもって行われている。

## 出羽神社祭礼



山形県羽黒山の出羽神社の御分霊を祀り、古くから塙三ヶ村(竹ノ内村、塙村、下渋井村)の総鎮守となっている。祭礼は、塙町秋祭りである十一月三日前後に行なわれる。戦国時代には、ここに山城が築かれたが、その名も出羽の修験道場があったことから「羽黒館」と称された。

江戸時代には、その祭礼の神幸行事には厳しい慣例が生まれた。塙三ヶ村では大年中行事としてこれを守り続け、今日でもその神幸行列には古式ゆかしいものが残されている。三年毎に行われる大祭には、町中を練り歩く神輿もあり、新しい行事も加えられて賑わう。

「松坂」

へ竹になりたや 紫竹の竹に

本は尺八 中は笛

裏はゑびすの 釣竿に

鯛つりあげて ニコニコと

へ一にお話 二に小樽入れ

三に魚を買い揃え

四には品物 買い揃え

五には御祝儀 おめでたい

へさてもやさしい 花嫁さまよ

下に白むく 浅黄むく

黒ちりめん こそ模様

金と銀との 丸帯を

長くそうように 縁結び

へこの家座敷は めでたい座敷

一の座敷に 嫁をとり

二なる座敷に 孫を持ち

三でさだめて 倉を建て

前に金倉 二十四ツ

後に穀倉 二十四ツ

会わせて四十と 八戸前

ピンとおろして 孫ゆずり

へ頼みまずぞえ 御両親様に

もろて育てた 梅ならば

あとの手入れを よく頼む

へめでたいものには 里いもの種

たけすがすがと 葉をひろげ

孫子あまたで おめでたい

へここは山家の 山なれば

おさかなとても 何も無い

ちようしの口にと 松を植え

松の小枝に 鷹とめて

小鳥おさえて おさかなに

「木挽歌」

へアー 木びきや さんかのヨ

山にもナ すむがヨ

アー きのみ かやのみ

ハ ドッコイ ドッコイ

たべやせぬヨ

へアー 山は 高山だヨ

木はナ 大木だヨ

アー 本山 なじょうで

ハ ドッコイ ドッコイ

引きくずすヨ

へアー どんど どんどとヨ

なるのはナ どこだヨ

アー あれば しもふさ

ハ ドッコイ ドッコイ

松戸がしヨ

「子ども精進唱え言」

ザンゲ ザンゲ 六根清浄

おしめに はつたけ 五ん合とうじ

いじじらい はいなも 帰命頂礼

「数珠繰り念仏」

帰命ナ 頂礼 十七の

玉のヨ ようなる 子を持って

無常の 風にと 誘われて

さてもナ 残念 情けない

脚絆ナ 甲掛 菅の傘

諸国 修行の 寺参り

寺のナ 小縁に 腰をおろし

泉水ナ などを 眺むれば

最早ナ 蓮花の 花盛り

咲いたる 花をば 散りもせず

つほみし 花をば 散りおちて

花もナ わが子も あの如く

最早 泣くまい なげくまい

「ひとごにふたご」

へひとごに ふたご

みわたす よめご

いずこに むさし

なんの 薬師

ここのえで いっぱんしよ

# 埴町の民謡

県内でも珍しい茶もみ唄が、上洪井地区に伝わっている。

上洪井地区の茶の栽培は、記録によると慶長十一年（一五〇六）に、宇治の製法が伝えられてからという。以来、棚倉藩内の珍しい茶の産地として献上も行われ、ひときわ栄えた。

五月下旬から一番茶を摘みはじめ、秋の彼岸の三番茶まで、毎日茶摘みと茶もみが続く。まず、摘んだ葉を大きな釜でふかし、板にあげてさます。

次にこれをホイロに入れてもむ。ホイロは一間に半間の鉄製の箱状のもので、カマドの上に乗せてある。最初は「葉うち」といって上下にもみ、次に「ダルマ」といって転がすように左右にかきませ、さらに「デングリ」となって仕上げる。「ダルマ」と「デングリ」の作業でうたわれるのが茶もみ唄である。生葉五貫目が一貫目の製品になるといい、これが一人前の一日分の作業量といわれる。

上洪井の茶作りも今は見られない。  
この歌は昭和五十六年十二月五日、郡山

市民会館で行なわれた「第二回福島県民謡まつり」において、埴町上洪井字安久津の白坂利光氏が、茶もみの作業とともに再現したものである。

## 「茶もみ唄」

ハァー

もめやもめもめ もまねきやよれの

もめばエ大葉も アノ小葉となる

ハ 洪井洪井と 名は洪けれど

一夜ねてみる 甘くなる

ハ 洪井よいとこ 後ろは山で

前は久慈川 茶の出どこ

ハ 洪井土地のせいお お色が黒い

黒いはずだよ 茶の出どこ

ハ 洪井よいとこ 新茶の出どこ

娘やりたや お茶摘みに

ハ お茶師さんかい よく来てくれた

今年や娘も 待っていた

## 「土搗歌」

ハ ひきやげ もちやげろ

天竺までも

ここは 大事な

隅柱 エーヤール

(囃し)

サーノヨイサ

ヨイヤラセーノ

エンエンヤレコノセ

サーノセ

アレハサイ

インヤール

ハ めでた めでたの

このどうづきは

鶴が 音頭で

亀がひくよ エサネー

ハ めでた めでたの

このやのやかた

鶴が 綱引き

亀ねとる エーヤール

ハ 譲った 譲ったよ

音頭を譲った

花も 実もある

〇〇さんに譲った エーヤール

尚、同じ頃に提出された調査書には、木挽歌、土搗歌、数珠繰り念仏、松坂、子ども精進唱え言等が報告されている。



## 赤岡の大竜

大昔、今の源八山竜沢寺の前の竜ヶ沢に大竜がすみ、人を呑みおどすことが続いた。源八なる者もこの竜に呑みこまれるしまつに、人々はたいへんに困ってしまつた。そんなところに義家が来たので、早速直訴におよんだ。

## 長者の話

湯岐に上台という小山のような高台があります。むかしここに上台源左エ門という長者が住んでおりました。

この長者は大へんな物持ちで、りっぱなくらしをしておりましたが、おもしろいことに縁起をかつぐ長者でした。そして、いろは四十八字を好んで何事にもそれにあやかるようにして使い、四十八ということをお大切にしました。

田も畑も四十八町にとどめ、家畜の数も四十八頭にしました。倉を建てることも四十八棟にならべました。たくさんの下男下女も働らいていましたが四十八人でした。そんな豪勢なくらしをしておりましたか

義家は、茶筌船山に陣屋をはり、ぶなの木の葉を茶に煎じて大竜の出現をまつた。そのうちに、一天かきくもり雷鳴をともなつた黒雲は、雨谷から西河内一带に広がり、その烈しい雷雨の間に大竜が見えた。この時とばかり、義家は力一杯弓を張り無数の矢を放つたところ、多数の矢が命中した。竜はついにたおれ、その出血で、西河

ら、その台地から南に当る所に、白山という山が一つ見えまして「あの白山が崩れてなくなるがあつても、この源左エ門の家はつぶれないぞ」と云つていたということです。

それからずっと後になつてからでしょうが、源左エ門がいなくなつてから、その近くの窪地に、かじやくぼ長者と云われる、かじやくぼ藤治右エ門という人が住むようになりました。この長者は、りっぱな刀かじをしておりましたが、表立つたことはいないで、隠者のようなくらしをし、そこで一生を終つたということでした。

また、その近くにほどくぼ幸藏という長者も住んでおり、鉄をとつていたということですが、近辺には「かなくそ石」と呼ば

内一带は赤く染められたという。そのうち、特に赤くなつた小高い丘を赤岡と呼び、竜の頭のおかれたところを蛇頭という。

雨があがつてから、住民が寄つて見ると、竜の体長は蛇頭から赤岡までの大きなもので、胴体には矢が千本もあつていた。千本という地名は今もある。

れる鉄かすが、今も見つけられるとのこと。です。

また、そんな長者の住んでいた所が知れわたつていたため、遠い町から移り住んでくるようにもなつたのでしょうか。つぎのような話が残っています。それは、京塚という地名と、大きな石碑が残されていることにまつわる話です。

遠い京都の町からか、戦乱のため落ちのびてきた身分の高いお姫様が、ここまでたどりつき、長者の加護によつて一堂を営み、都に残されて、亡くなつた方々の追善供養をしたとのこと。その供養碑が京塚だと云われています。

# 埴町の民話・伝説

昭和五十五年、埴町教育委員会より『はなわまちの民話と伝説』という小冊子が発行された。全部で六十ページの中に三十六編の話が収録されている。ただの笑い話や、教訓、戒めを含んだ内容の話等様々である。共通している点は、たいてい埴町の地名、またはゆかりの事象が登場してゐることだ。

## まんだら堂

まんだら堂という十一面観音をまつるお堂が古宿にある。このお堂は、大同年間にこの地に住んだ朝日長者の建てたものと伝えられている。

この朝日長者は七人の男の子があり、何不足なく暮していました。ところが、たいへん邪けんな人で、この地を通る修業者、旅人、その他、金を持っていると思われる者に宿を貸し、石のおとしで殺しては金を奪っていたという。

そんなことを続けたため、大罰が下ったのか、ある年の正月二十日の日から、順に子どもが七人、七月二十日までに皆死んで

ある。現存の事柄の由来等を伝承する話は、真实性はともかく、埴町に限定された話であることに間違いはない。

しかし、長者話のように、地名等が埴町に関係していることを除けば、他の土地でも類似した話があるものも多い。

しまった。長者夫婦の嘆くこと限りなく、果ては、髪を下げて諸国修行に出てしまった。

子どもの菩提をとむらい、後世安業祈願、回国を続け山々を登り苦行を続けた。

越中の館山をたどった時、中途にして日は暮れ、柴の根元に仮寝をし、なお子どものためと念仏を唱えていたところ、一人の旅僧がどこからともなくやってきた。

その旅僧は、願いをきき、肩にかけた衣の袖の内から、七人の子どもの姿をのぞかせてくれた。見ると、わが子のさいの河原の苦行、火の山、火の車の様子が見えたので、このうえなく嘆き悲しんだ。

そして、その僧に御慈悲を願い、伏し拝

んだところ、その僧の申すには、子どもがかわいいと思うならば、早速故郷へ帰り、末の世まで残るようなお堂を建て、まんだら供養をするがよいと言うや阿弥陀如来の姿となり、雲に乗って西方彼方飛び去ってしまった。

長者夫婦はその後姿を伏し拝み、早速故郷へ帰り、帰宅するやいなや大工を頼み、一夜のうちにお堂を建ててしまった。

そして、まんだら供養を続け、そこに来られた慈覚大師のお作りになられた十一面観音を本尊とし、末世のため、朝日さし夕日さす樹の下に漆千杯、朱千杯、黄金千杯を埋めて供養とした。

その後の、正月二十日の御縁日には参拝者が多く、一度お詣りすれば六道三途に迷いなく、再度お詣りすれば、どのような悪人でも救ってくださるといふ。また、この御慈悲を疑う人は、地獄におちること矢のようだとお言われている。

先年まで、長者屋敷と言われた上壇の一区画があったが、今は耕地として平にされてしまった。

## 蛇骨明神

学校のあつた一隅に、獵師殿の篇額のある山幸神社、ここ真名畑では明神さまで通っているお社がある。

今は見ることができないが、杉の大木があつたしるしに切株がいくつかあつて、昔は、昼なお暗い鎮守の杜であり、それこそ真名畑村を守護する威容を示したことであらうと思われる。

昔は、この杜前にあつた神木にかかわること、その大きさは、周囲十米余、高さ百米余もあり、幹は空洞になつていて、どうしたことかこの中からは、常にある種うなり声がきこえたという。

或る夕方、この前を通つた村の一人が、白衣を着た女らしい人が空洞の前に立っていてまわりに落ちてゐる杉の枯葉を拾つては、ぽいぽいと空洞へ放り込んでゐるのを

## カネコロバシ

古代金を掘るまじめな坑夫が、何日か家を留守にして稀にみる珍しい金の塊を見つけた。かかあに見せようと喜びいさんで家に急ぐ途中、癩癩持ちのかかあと出会つた。

みて、ふしぎなことをするものだと思つて家に帰つた。

ところが、次の日の午後二時頃、雷鳴とどろく悪天候となり、ついにこの神木に雷が落ち、青い火を出して燃えあがり大火になつた。村の人々が馳せ参じたが、近づくこともできない程で、左右上下大小の枝が燃え落ちる有様は、真赤な岩石の崩れ落ちるようであつた。それでも、本殿が危険だと言うので、大ぜいでお移し申し火災から守つた。

神木はなおも燃え続け、翌日の八時頃燃えながら南側へ倒れた。

南側には、八溝川をへだて真向いにそびえる岩山の石尊山があり、それへ倒れかかつたので、丁度、橋をかけたようになつたという。

その後、村の人々が神木の根元をあらためると、胴まわり六十糎程もある蛇の骨と

得意げに金塊を見せたところ、「幾日もどこを歩いてきたのか」「何がこんな物」と癩癩を爆発させ、崖下の八溝川めがけて金塊を投げつけてしまった。以来この地を金ころばしという。

後世になつて、その金塊が真名畑地内の

見られるものがあり、小骨などは無数にあつた。また、その南東の方へは深い深い穴があり、北の方には頭の骨があるだろうと、岩穴のところまで掘つて見たが、水が湧いてきて底がわからなかつた。

これらの骨を集めて、明神様の別堂であつた真蔵寺という寺へ納めたが、この話を聞いた近隣の人々が、参詣にくるわくわ、大へんなにぎわいが続いたという。

この落雷は、旧暦二月十五日ということ珍しい季節の出来ごとであり、思い合わせると、獵師大明神の化身が、大蛇を焼死せしめられたものであらうか。御神徳を物語ることは言うまでもない。

なお大蛇の骨は後になつて、蛇骨明神として当社の傍に祀られることになり、近年までそのほこらがあつたが、今は見られない。

八溝川で一番深い「ミノワ淵」にあるのではないかと、淵の一番狭いところから脇の岩に穴を掘り、川をせき止めて淵の水を払つてみる回数、ついに金塊は見つからなかつた。

金掘山師の残念がることしきり。

## 与次郎稲荷の狐

米山旧参道の入口近くに、与次郎稲荷という祠があります。この稲荷のお使い狐が、昔から与次郎狐と言われて、この土地では有名な狐だったそうです。

この狐は、二十キロも離れた鮫川村の北の境に住んでいたおよし狐へ、婿入りをしてしまうほどの評判の高い狐でした。

与次郎狐は白狐だったと伝えられています。夜になると、米山の中腹で「曹徳寺の惣領とやじの乙姫が揃わぬうちには、いっこの調子がそろわねえ」という歌声になって、

## 茶筌船山

田代の奥に茶筌船山という、標高七百七十余メートルの山があります。阿武隈山脈の、ひととき高い山ですが、この山の名が変っているところから、いくつかの伝説が伝えられています。

昔、八幡太郎義家が、この地方を平らげてこの山に登られたことがあります。その時頂上にあつたぶなの木の下におやすみになられた。のどがかわき、飲み物を言いつけたので、家来の者が、この大木のぶな

狐の踊りが始まったそうです。

曹徳寺は双の平にあり、与次郎狐のところでも「しほった川原の与次郎、双の平の曹徳寺、この二人が揃わぬうちは、声も調子もそろわぬ、どんどこどん」と言っていて踊ったことが書かれてありますから、狐も相手がなくては踊りにならなかったのでしょうか。そしてこの二つの話とも、曹徳寺の狐が引き合いに出されており、惣領と言われたことから、多分、与次郎狐だったのではないのでしょうか。

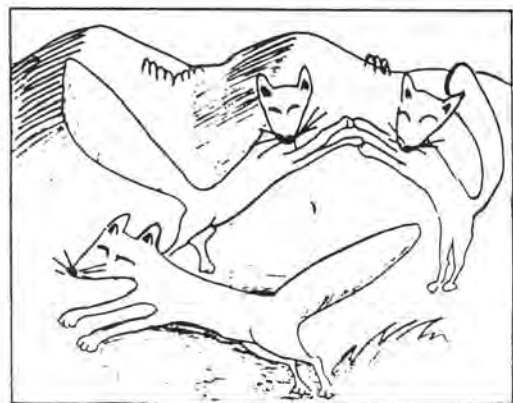
双の平の南、上洪井には「館の権吉」という侠客の親分みたいな名の狐が住んでお

の葉をせんじて、お茶がわりに差上げたので、ちゃせんぶなどいうのだそうです。

その他、八幡太郎義家が、この山の頂上に登られた時、はるか東の方、太平洋上に船が見え、だんだん海岸へ近づいてきて、港に入るのが見えたとのことです。海岸のことをしらべると、海の方からもこの山が見え、その頂上にぶなの大木が見えるので、海上からはこのぶなを目あてに着船するようになり、したがって、着船ぶな山と呼ばれるようになったというのです。

また、ずっと前までは、頂上に大きなぶ

り、お互いに勢力を争ったようです。



なの木がこんもりと繁っていて、お茶に使うちゃせんんに似て見えたことから、そんな呼び名になったのではないのでしょうか。

山から海岸までまっすぐに測ると、小名浜まで約三十六キロ、勿来の菊多の浜まで二十六キロもありますから、小さな船の時代、望遠鏡でも見えなかったでしょうし、日本でお茶が使われるようになったのは、義家の後二百年もたつて、中国から伝わってからになっています。



木挽鋸



田植下駄



万石通



千歯扱



フイゴ



株間除草機



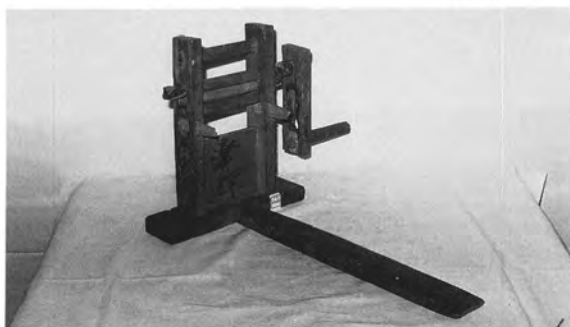
まぶし折機



田打車



糸繰機



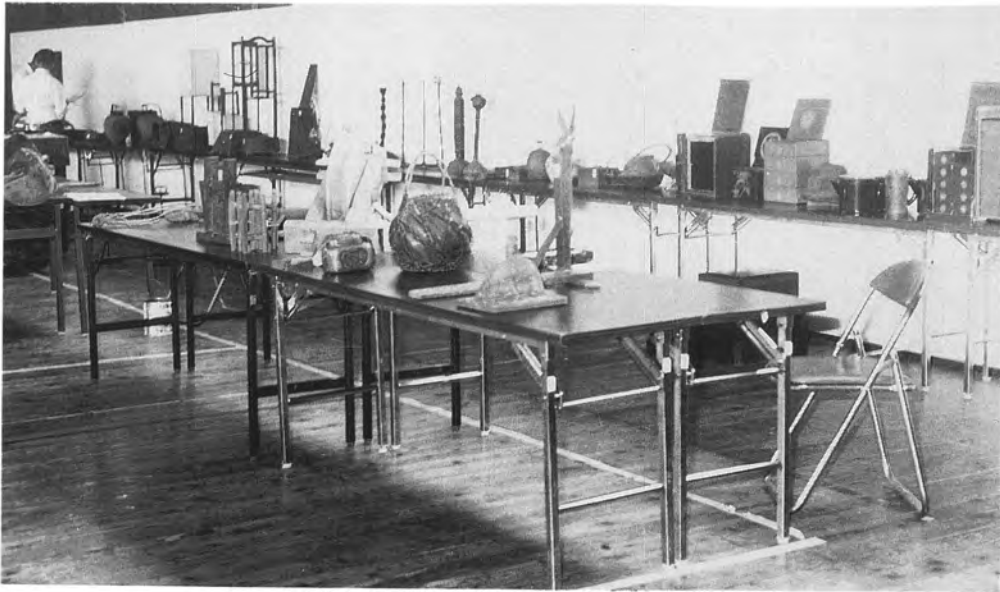
綿実とり機



桑扱機

懐しの

生活・農耕用具



生活回顧展（昭和55年9月・公民館）



井戸車



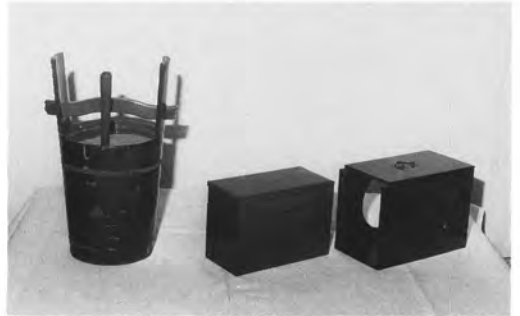
餅のし器



大根おろし器



道中合羽



芝居弁当



時計



鞍



長火鉢

時代	西暦	年号	埴町のできごと
江戸時代	1775	安永 4	古宿観音堂境内に自然石の手水盥つくられる
	1776	安永 5	台宿薬王寺の宝篋印塔が建立される
		天明年間頃	田代中里の北野神社祭礼始まる
	1789	寛政元 寛政年間	台宿禅林寺跡の念仏供養碑建立される 医師緑川利資常世中野に在住
	1790	寛政 2	台宿薬王寺薬師堂建立される
	1792	寛政 4	台宿薬王寺に宥善上人追慕の碑建てられる
	1792	寛政 4	寺西重次郎封元代官職につく（文政10年まで）
	1793	寛政 5	台宿薬王寺地藏尊つくられる
	1793	寛政 5	向ヶ岡公園造営される
	1794	寛政 6頃	植田薬師堂木造薬師如来立像つくられる
	1798	寛政10	古宿観音堂境内に三界萬霊碑が建てられる
	1801	享和元	埴陣屋跡の十九夜念仏供養塔建立される
	1808	文化 5	八幡宮本殿建立される
	1808	文化 5 文化年間	台宿薬王寺に二十三夜塔建立される 安楽寺山門建立される
	1819	文政 2	米山湯殿山碑建立される
	1819	文政 2	向ヶ岡公園に和文の誕育冢建てられる 湯舟観音堂に現存最古の絵馬が奉納される
	1821	文政 4	台宿熊野神社霊符神の石碑建てられる
	1822	文政 5	米山如意輪観音像碑建てられる
	1828	文政11	台宿薬王寺薬師堂に『御詠歌』が奉額される
	1829	文政12	向ヶ岡公園に粟島大明神碑建てられる
	1838	天保 9	旧勤行院観音堂建立される
	1838	天保 9	常世観音堂再建される
	1851	嘉永 4	台宿薬王寺に馬頭観世音碑建てられる 台宿金沢利治氏宅建てられる（元治元年以前）
1864	元治元	古宿観音堂境内に如意輪観音碑建てられる	
1865	慶応元	水戸天狗党田中愿蔵の供養碑建てられる	
1866	慶応 2	稲沢髭題目の碑建てられる	
1868	慶応 4	埴陣屋が廃される	
			その他の江戸時代のできごと 天照寺木造大日如来坐像つくられる 東浄寺木造薬師如来立像つくられる 東浄寺木造薬師如来立像つくられる 薬王寺木造薬師如来坐像つくられる 宝泉寺木造大日如来坐像つくられる 湯岐阿弥陀堂木造阿弥陀如来立像つくられる 龍沢寺木造阿弥陀如来坐像つくられる 薬王寺薬師堂仏輿製作される（江戸後期） 画家荒川九潤常世中野へ移住（江戸末期）
明治時代	1892	明治25	棚倉藩士関口松宇（画家）上石井上ノ原に帰農 稲沢二十三夜塔碑建てられる
大正時代	1969	大正 5	出羽神社馬力神碑建てられる
昭和時代	1930	昭和 5	灯籠流しが始まる（7月）
	1952	昭和27	愛宕神社祭典復興の大祭礼がおこなわれる

# 埴町文化財略年表

時代	西暦	年号	埴町のできごと
縄文時代			縄文時代の主な遺跡 羽原谷地遺跡（中期）大畑遺跡（中期） 下稲沢遺跡（中期～晩期）中根遺跡（後期～晩期） 真名畑宮田遺跡（後期～晩期）東河内遺跡（晩期）
弥生時代			台宿南原遺跡（縄文～古墳）
古墳時代			高野里古墳
奈良時代			
平安時代	811	大同年間 弘仁2	古宿まんだら堂建てられる 「高野」の駅設置される（『日本後記』）
鎌倉時代			下植田薬師堂薬師如来坐像つくられる このころ羽黒館築城される
室町時代	1360	延文5	上渋井の板碑建立される このころ 常世観音堂木造如意輪観音菩薩坐像つくられる（南北朝時代） 賢瑞院木造地藏菩薩半跏像つくられる（南北朝時代） 湯舟観音堂木造聖観音菩薩坐像つくられる（1400年代） 徳林寺木造十一面観音菩薩坐像つくられる
	1538	天文7	石川静阿弥、八溝山下の一坊に梵鐘を奉納
	1554	天文23	安楽寺木造如来形立像つくられる
安土桃山時代		天正末	板庭銚子館築城される
江戸時代	1606	慶長11	上渋井に茶の栽培が伝わる（「茶もみ唄」が生まれる）
	1653	承応2	愛宕神社が建立される
		寛文年間	湯舟観音堂移築される
	1685	貞享2	宥善上人入定する（62歳）
	1689	元禄2	台宿禅林寺跡の六字名号供養碑建立される
	1699	元禄12	植田歎喜院跡の六面地藏尊碑建立される 賢瑞院観音堂建立される 賢瑞院木造釈迦如来坐像つくられる（宝永3年以前）
	1710	宝永7	真蔵寺木造地藏菩薩坐像つくられる
	1710	宝永7	賢瑞院本堂建立される
	1715	正徳5頃	徳林寺木造薬師如来坐像つくられる
	1717	享保2	植田の吉成正大氏宅建てられる
	1729	享保14	埴に陣屋が設置される
	1734	享保19	東浄寺木造弘法大師坐像つくられる 古宿観音堂建立される（寛保2年以前）
	1742	寛保2	古宿観音堂天井絵（狩野益信筆）描かれる
	1753	宝暦3	銅造地藏尊半跏像铸造される
	1754	宝暦4	北野神社本殿建立される 賢瑞院山門建立される
	1760	宝暦10	東浄寺薬師堂建立される
	1760	宝暦10	東浄寺薬師堂に『武者絵』奉納される
1768	明和5	海蔵寺木造開山任山良運坐像つくられる	
1769	明和6	高野里天照寺跡の南無金光明最勝王經の碑建立される	
1772	明和9	青面金剛像碑建立される	





文化財愛護シンボルマーク

## 執筆・協力者一覧 (敬称略)

東北工業大学教授	草野 和夫			
福島県立博物館学芸員	若林 繁			
塙町文化財保護審議会会長	藤田 清			
同 副会長	荒川 栄三			
同 委員	秦 次郎			
同 同	賀来 清市			
同 同	加藤静次郎			
青砥 和夫	青砥 久信	青砥 康友	安部 寛	安楽寺
大森 弘一	海 蔵 寺	菊池 敏夫	賢 瑞 院	近藤 良平
鈴木 正善	東 浄 寺	徳 林 寺	秦 まつよ	宝 泉 寺
星 勇	薬 王 寺	龍 沢 寺	常世中野区	

## 引用・参考文献一覧

- 『福島県の民家Ⅳ』福島県文化財調査報告書第41号 1973 福島県教育委員会  
『福島県の彫刻』福島県文化財調査報告書第52号 1975 福島県教育委員会  
『福島県の絵画・書跡』福島県文化財調査報告書第55号 1976 福島県教育委員会  
『福島県の絵馬』福島県文化財調査報告書第56集 1977 福島県教育委員会  
『福島県の民家Ⅴ—第2回緊急調査報告』福島県文化財調査報告第72号 1979 福島県教育委員会  
『福島県古文書緊急調査報告Ⅱ』福島県文化財調査報告第119集 昭和58年 福島県教育委員会  
『福島県の漆工品』福島県文化財調査報告書第120集 昭和58年 福島県教育委員会  
『「歴史の道」水戸街道』福島県文化財調査報告書第156集 1985 福島県教育委員会  
『福島県の民謡—第2回福島県民謡まつり記録』 昭和57年 福島県教育委員会  
『塙町史』第1～3巻 昭和55～61年 塙町  
『塙一史蹟と町勢』 昭和32年 塙町役場  
『塙町の文化財 第1集』 昭和53年 塙町教育委員会  
『はなわまちの民話と伝説』 1980 塙町教育委員会  
『塙町の城館址』 昭和61年 塙町教育委員会  
『塙町の貝化石』 塙町教育委員会

## 時代(とき)の響き—塙町の文化財—

平成2年1月 発行

編集 塙町教育委員会  
発行